
Die and Diary (改訂)

木村 瑠璃人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Die and Diary (改訂)

【Nコード】

N2328T

【作者名】

木村 瑠璃人

【あらすじ】

あまりにも増えすぎた殺人事件、病巣のように世界に蔓延る殺人者を抹殺するために作られた仕事人、「NAS」。その存在を養成するために作られた国立校、『硯学院』。その学院に属する一人の少年と、その少年にあこがれる少女の物語。

2011年5月13日より、すべての設定を見直し再投稿始めました。

1・飛行

空を飛ぶことに、憧れはないだろうか。

単純な話、授業中とか、退屈な休憩時間とか、やることも特にな
い放課後とかにぬぼー……っと空を見てるときに。

……あー、空飛んでみてえー。

とかそんなこと、思ったこと、ないだろうか。

ああ、あるある！ とか共感してもらおう必要はない。少なくとも
休憩時間とかに空見てるような奴が、一回でも飛んでみたいと思っ
たことがないなんてこと、ありえない。少なくともそのはずだから
だ。

自由な蒼穹、限りなく高い俯瞰の風景。

鳥のように羽を羽ばたかせるでも、どっかの電話ボックスで返信
するスーパーヒーローのようにマント一丁で飛ぶでも、海外のスパ
イ映画に出てくるようなブースター背負って飛ぶでもいい。何なら
頭上にプロペラ付けたっていいだろう。

有形無形、すべての束縛から離れた自由な中を、そんな風に旅す
る。

この世を憂う、とか格好付ける必要はない。要はここじゃないど
こかに一回でも行きたいと思った連中の夢。

だが正直なところ、空を軽々に飛ぶことを実行に移すべきではな
い。

現実は何てして非情なもの。すべての自称は『規律』と『因果』
に縛られてる。

人の肉体で羽ばたき空を飛ぶには人の身は重すぎる。

何もなくビルから跳べば路面へ叩きつけられて血肉をさらし、
ブースターを背負えば、背は焼け焦げる。

頭上のプロペラも危険だ。音速超過の回転するプロペラは人体をたやすく破壊し、結局飛ぶのは頭皮だけだ。

人の身に、蒼穹に行く体躯は重い。

得たところで、それは破滅にしか直結しない。

それが現実、それが当然の因果。だからといって恨むことも憎むことも、仮になし得た人間がいたとしても妬む必要はない。

それが『できないこと』は人間にとって当たり前、『できること』こそが異常なんであって、『できないこと』を嘆く必要性すら元来皆無なのだ。

だから、

『俺』がこんな風に飛んでいることは異常なことだ。

『私』がこんな風に堕ちていることは当然のこと
それだけの、話なんだ。

x x x x

踏み出した足は宙を踏みこんだ。

床も大地も存在しない、宙という名の空間。道行く人が見上げることもなく、通りの向こうの窓から覗く者もない、立体的な死角の中、俺は決死の覚悟で跳躍する。

重力から解放される、刹那。

着地は衝撃と同時、殺しきるのは容易だった。再び四秒ほどの障害物上の加速の後に、もう一度俺は飛ぶ。

ビルとビルの感覚は存外に広く、案外狭い。重要なのはやろうと思っただけの意思と踏切りを躊躇わない思い切り。それさえ揃えばこの程度の芸当、中学生でもできる。

だが、今の俺のような状況

ギンツ！

「……………」
追われている状況下となれば、話は別だ。

……………くそつ。
視界の隅で散った火花。それはつまり、背後から追っかけてきてる『そいつ』が相当な距離……………少なくとも同じビルの上に存在することを示している。

追い立てられるように三度の跳躍三度の着地、受け身をとるようにして身を転がし、ブレザーの脇から『それ』を取り出す。

ポリマーフレーム、全長十九センチ、装弾数十七発の、自動拳銃。他所の国では絶対的暴力の象徴であるはずのその存在も、今この場所においてはごく当たり前、小さいものであればランドセルの中に入れて入っている代物だ。

ろくな狙いも定めず、適当に背後めがけて、撃った。

跳ねる銃身^{バレル}、暴れる握り（グリップ）、前後する遊底^{スライド}と排出^{イジェクト}される空薬莖。着弾したビルの淵はコンクリートの砂塵を上げて穴を穿ち、砲声をあたりに轟かせながら威圧の痕跡を刻む。

刻まれた兆弾、踊る火花に、追跡者の影がビルの陰へと身を潜める。

「……………」
転がるようにして身を跳ねあげ、再びビルの反対側へと走った。
屋上の淵、眼下の町に轟いた銃声。人影は疎らな朝の一時が崩れた様子は、ない。

人殺しは日常、人死は通常。

見知らぬどこかの死は当然のことで、銃声には、振り返らない。

「……………」

気合いとともに屋上の淵から四度目の踏み切り。

こちらとの距離は、目算でおよそ六メートル。

届くか届かないか、その選択を一瞬脳裏に描く距離である。が、届くかどうかはこの際関係ない。

届かないと判断して立ち止まれば背後の脅威に殺傷され、届くと判断して届かなければ大地に叩き付けられて死ぬ。

二者択一のはずの選択肢は両者の結果がほぼ同一という無常を突き付けて単一の隘路へと追い込まれ、結果唯一の道へと生を求めて選ぶ道は一か八かの跳躍という、ただ一つの選択肢。

重力から解放される、わずかな時間。

身を支える一切の力を失い、ただ前へ進むための力と万有引力に身を竄す、恐怖。背後から撃たれれば無防備に落下し、追い縋って跳躍されれば無防備な時間を追跡者にさらしてしまうことになる。絶対に回避したい数瞬間、届くか届かないかのイベント分岐点。

起源はいつなのか、正確にはわからない。

ただ一つ理解できるのは、その法令の存在が社会を劇的に変容させたという、一つの事実のみ。

……届く！

踏み切った足は明確に屋上を踏み、余った勢いは体制を前のめりにさせる。

スマートとは言い難い着地、それでも生きていることは確かだ。

安堵するにはまだ早い、選択肢に勝利したのは間違いない。

足を止めることなく屋上を駆け抜け、その反対側で再びの、

法令の名は、国家承認殺害者特措法。

拡大し感染し蔓延し暴走した『殺人事件』、それを抑止するために生み出された、『人殺しを殺すための法案』。

跳躍、その前動作が、止まった。

「……………うっそだろ…おい」

見下ろす眼下、広がったその風景は大通り。

いつの間にもここまで来ていたのだろう。片側三車線のその道路は跳躍に踏み切る選択肢云々の前に、人間においてなせる限界をはるかに超えている。

……………他に逃げ場は……………っ！

急がなければ、背後から『奴』がくる。焦燥に駆られるまま目線は屋上の全景をさまよう。このビルはほぼ正方形、来た方向は無理、他の方向は。非常時用の脱出スロープは。窓清掃用のゴンドラは。隠れられる場所、時間を稼げるような何かは

……………ダンツ。

背後で響いたその音に、不吉を聞いた。

「……………」

息の硬直背筋の剛直。全身の緊張は心中を偽らず、焦燥は冷や汗となつて、冷やかに。

最悪の現実が形になった確信。否定を望むように、あるいはその現実を肯定するために、背後を振り返った。

かつては恐れられていたマフィアや暴力団、街中の不良は暴力の象徴ですらなくなり、

一大事件であつたはずの通り魔は、交通事故並みの存在へと墮し、

市民を守るはずの警官すら、公的な守護の役目をその存在へと委譲した。

究極ともいえる暴力を振りかざすその存在こそ今の治安を守る力ギで、命を守る要。それが、今の社会というものの現状だつた。

闇の中に全てを葬るような、肉体のラインを完全に覆い隠す黒。ケープへ通じるフードは、目線を隠すように目深に。

街中に出現したシミのようなその姿。黒ばかりのその姿は、見ようによつては社会に反抗したい盛りの中学生のファッションとも取れなくはない。しかしそのどこか現実逃避にも似た認識はその人物の手にある大型の自動拳銃とケープに滲んだ『赤』によつて消し飛ばされ、結果残るのは『黒』という色が元来持つ、異様なまでの存在感。

「……………」
「……………」
何かを呟くような音が、そいつのフードの奥の暗がりから漏れる。何かを問うたのか、何かを確認したのか、少なくとも問いかけるようなニュアンスで発されたその言葉は、しかし俺には届かずに風音に消えた。

届かなかった、声。

だけど、何を言ったのか予想はできる。推測でも憶測でもない、自分勝手に主観に偏ったそれは予想、確証も何もないはずのその声は、確かに俺にはこう聞こえた。

……………あれを、見たのか？

隠すことはできない。答えは是、イエス、肯定。俺は確かについて数分前、こいつの行った『見られてまずいもの』、『見たどうかを問いただすに足るもの』を、見た。

人殺しの、その瞬間。

俺と同じ学校、同じような改造をした同じ制服、同じような髪型と、どこにでもあるような風貌。平たく言えば没個性のその少年の口腔へと付きこまれた銃身、腰砕けになったその少年を覆い隠すように屹立する眼前の人物。見える姿に揺らぎはなく、動く姿にためらいは見えない、そんな姿で、この人物は、

ただ単純に、引き金を引いて、

そしてその少年の頭の中身を、空きテナントばかりが乱立するビルの踊り場の壁の装飾に変えたのだ。

前衛的すぎる芸術の創作現場、そこに出くわしてしまったのは、まさしく不運としか言いようがない。さらなる不運は、新学期開始までの時間つぶしのために、俺がそのビルに上っていたことだろうか。

そしてその逃げ場のない状況の中、目撃した事実をどこにどう連絡したのか模索している間にこいつが俺の視線に気付いて顔をあげて、発生したのがさっきの逃走劇。

理解できる。俺とてこの世界に生きる人間で、社会が欲した仕事人、その養成学院に通う学徒なのだ。やってくる理解は当然のものとして理解に容易で、当惑のさしはさまれる余地もない。

単純な話、眼前のこの人物は一切ためらわない。

俺が学生であることも、まだ歳若い人間であることも、『逃げること』を選んだという事実も無関係に、この人物は俺のことを殺すだろう。

今俺に銃口が向いていないのも、おそらくはただの確認のための時間取りだ。

そしてそれが終われば、こいつは間違いなく俺の頭の中身をこの屋上の床の装飾へと変化させるはずだ。

……畜生。

こんなところで、終わりか？

生まれてからたったの十六年で、ろくな結果も残さずに？

誰にも知られずに、こんな黒いのに殺されて終わりなのか？

……そんなの……

口の端が、自らを鼓舞するように歪んだ。

「……受け入れられるわけ、ねーよな……」

「……？」

眼前のそいつの首が、怪訝に傾げられる。

……なんだやつぱりこいつも人間なのか。

その事実の認識に、沸きあがったのは安堵。殺されない、ではなく自らの側からも殺すことができるという、至極当たり前の道理が存在することを認識した、『得たいの知れない化け物』が『堂とでもなる敵』に変化する瞬間。

「まったく……新学期早々面倒なことに巻き込まれたかなーとか思ってたけど、まさかこんなことになるなんてな……」

隠しとくつもりだったのに。
使わないつもりだったのに。

状況が狭めた選択肢、その悪意が、俺にそれを使うことを強要する。

自然ともれたため息、その後、

「前衛芸術の製作現場にばったり出くわし、変な黒いのに追い掛け回されて、拳句の果てにや追い詰められてこのシチュエーション……いくらなんでも面倒臭すぎんだろこりゃ……まったく」

「……」

眼前の黒衣が、困惑したように肩をすくめた。

そりゃそうだ。俺だっていきなりこんなこと言い出す奴と出くわしたら困惑する以外に道はない。これも状況が狭めた選択肢、当たり前にして必然の結果だ。

「まあ、いくらばやいたって見ちまったものは変わらねーんだけど

……」

「っ」

黒衣の姿が、明らかに緊張する。歩幅が一分大きく広がり、銃口がわずかに動いて刹那を渡る覚悟を決め、腰にも何かを隠しているのか、開いている左手がそちらへと伸びる。

臨戦態勢、その構えに、俺は手の中の銃を脇のホルスターへ『戻した』。続く動作で変わりに取り出したのは、胸ポケットの中のバタフライナイフ。

ゆるりとした動作で展開し、腰をかがめた。

「……ただ殺されてやるつもりなんて毛頭ねえ。俺を殺したきゃ、殺されるつもりでかかってこいよ、人殺し」

ガアンッ！

銃声。

見えたのは黒衣の手の中の閃光と、腕が跳ね上がったという事実だけ。

飛翔した弾丸は見える余地などなく、ただただ破壊という結果だけを現実として認識させる。何もしなければ訪れるのはヘッドショット、一人の学生が屋上の前衛芸術へと変えられた、ただその後の風景だけだ。

だけど、狙ってくる位置があらかじめわかっていたとしたら、

……話は、違うっ！

ピュンッ！

発砲とほぼ同時、俺の右の耳元を不快な音がはじけた。

正確な狙いは避けやすい。それも相手が俺の通う学園の存在を知っているのならなおさら。

俺の通う学園はこの近隣でもことさらに有名で、ことさらに物騒。それ故に支給される制服の上着は、すべて防弾加工されている。相手がそれを知ってて、なおかつこの距離で狙うとしたら眉間以外にありえない。

思い切り横に倒した姿勢、耳元を掠めた銃弾。頬に引かれたライオンは赤く、薄く長く血がにじむ。続く連射を前かがみで潜り、床に手を着き身を深くかがめ、

踏み込んだ。

思い切り、後方に。

「っ？？」

身を翻す刹那、黒衣の動きに驚愕がにじむ。無理もない。背後にあるのは片側三車線、飛び越えるには無理な長距離だ。ワイヤーも装備してない状況で下には降りられないし、それに到底飛び降りられる距離でもない。

そんなことは、わかってる。

わかっていてなお、いや、わかっているからこそ俺は屋上の淵を踏み込んだ瞬間、全力で跳躍した。

風の音を切る圧縮された数秒間。跳躍という次元において人間は獣となり、不要な機能は地に放置され結果残るは人型の獣。落ちるという感覚すらない時間の中、自己という名の獣を幻視する。

だが、それでもなお届かないことは自明の理。故にこそ俺は対峙の覚悟を一時決め、追跡者も問いかけに時間を費やした。飛ぶことで繋がるのはただの死、その事実を再確認し、

再確認したその瞬間に、俺は自らの目を『切り替えた』。

かちり。何かがはまり込んだような幻聴。歯車が嵌まり込んだように動かなかった別の箇所が動き出す感覚。それと同時に視界にあふれ出すのは、縦横無尽に視界を塞ぐ、闇の色持つ昏い線。

世界そのものから湧き出るようにあふれ出る、漆黒の線。見える根底は地の底に続くように建造物の、地面の、人の、車の、街路樹の中へと消え、あるものは空から、あるものは何も無い中空から、またあるものは大地から現れ、そこにあるものに絡みつくようにして吸い付く。

すべてががんじがらめ、束縛された世界。

見下ろす俺にも例外はなく、見える世界が、縛られている。

見下ろす肉体、がんじがらめに縛る糸。その中でも一際目立つ、凶悪なまでの太さを持つ一本へ俺はナイフを走らせ、切断する。

自らを拘束する縄を切断したような、一瞬の解放感。その中に埋没することなく、落下の最中、俺は一步を『踏み込んだ』。

足元は何もない中空、踏み込むための床も大地も遠くへ置き去り、踏み込んだとしてもただ宙を蹴り、崩れた重心はそのまま俺を転落

による死の底へと落ちていく。それが日常の中での道理だ。

だがそんな道理を踏み越える覚悟なしに誰がこんな中空に跳び込む？ 踏み越えられると知らずに誰がこんな所へやってくる？

誰に向けたわけでもない問いかけに答えるように、俺の肉体は踏み込みで答え空中で跳躍した。

普段の跳躍をはるかに超える、重力による縛りすらも存在しない自由自在な空の行程。大地の制約も空の圧迫もない、ただひたすらに軽やかで自由な移動。

風切音は耳に涼しく、翻る布地は火照った体に心地よい。落ちることなく水平に、地面を踏む感触もなく移動する感覚は新鮮で、斬新でそれでいながら心地よく、異常を孕みながらも神秘という名の言葉に置き換えられる。

時間にして、だいたい三秒ほど。

宙をかけたその体はくると向かいのビルの屋上で回転、飛行の勢いを殺し、そのまま床へと着地する。

「……………ふう」

政府の認めた仕事人、その名を『NAS』という。

老若男女すべてを問わず社会の中に埋没し、いつでも誰を殺しているかわからない物騒な連中。その認識を抱かれながらもその存在は社会に肯定され、社会の中に、息づいている。

ため息と同時、久方ぶりの飛行で乱れた制服をざつと整え、手中のバタフライナイフを納刀する。

「……………つと」

納刀動作の中、関係のないラインまでナイフの刃先が引つ掛かった。危ない危ない、下手にどれかわからんライン切って碌な事にあつた試しはない。納刀中とは言え、気をつけねば。

開いたときは逆の感覚、腕が一本消えたかのような感覚で、視界から黒い線が消えた。

ポケットの中にナイフを突っ込み、渡ってきた通りの向こうへと目をやる。

大通り挟んで向かい側のビルには　　おお、いるいる。この距離だと人形ぐらいにしか見えない、なんだか黒いの。屋上の淵に立って身を乗り出して……どことなく啞然とした風にこっちを見ている。

こりゃいい。いい見せものだ。飽きるまで見物させてもらおう。飽きた。

「……まったく」

つぶやき、腕時計をちらり。指し示す時間は八時寸前の七時。うむ、まだ余裕ではあるが急いだ方がよさそうだ。このまま悠長にここで時間使って、またあれが追っかけてきても困る。とっところ登校してこの街で一番の安全地帯へ逃げ込め

バキョツ！

………バキョ？

………なんだろう。

なんだかすつごーくいやな音が後頭部ではじけたような気がする。

ちようど………そう、あれだ。校内での授業。あれの失敗射撃ミスショットのときの音。屋内射撃で的以外のところに当てた時の音にそっくりだ。珍しーなーこんな街中の屋上でおんなじ音聴くなんて。それもこの音、三十八口径（9ミリ）じゃないな。かといって俺のと同じ四十でもない、四十五でもまだ小さい。ちようど板橋の奴が使ってるあれ、スタームルガーのレッドホーク。あれがミスったときの音によく似て

って。

「マジかよおいっ！」

後頭部わずかニセンチ。打ち抜かれ弾丸一発にしてはあり得ないほど巨大なクレーターが穿たれてる。向かいのビルに目をやれば、

なんということでしょう！ そこにはこちらに拳銃を向けるあいつの姿が！

「まったくっ！」

全力でその場から駆け出し、

「洒落になってねえっての！」

2・式の前

× × × ×

国立 碓^{すくは}学院はN A S養成のための国策学校である。

広大な敷地の中に複数個所の戦闘訓練場、多種多様な設備を有する学舎、周囲に完備された商業的な施設など、そこには若人が学ぶためにおおよそ必要なすべてがそろっている、といってもいい。

と、いつかそもそも碓市自体、碓学院の創立確定によって設立された学園都市だ。

ついでに碓学院も、目的は確かにN A S養成のためで、保有する学科の中で最も大規模なのは『N A S養成科』ではあるが、ほかの学科もちゃんとある。

年間に排出するN A S数はトップクラス、年間に発生する死傷者数はアンダークラスで、保有する設備としても国内最高。N A S教育において最高峰とも呼べる場所。

それがここ、国立碓学院という場所なのだ。

が、やっぱりそこは学校。そこで行われていることは他の一般校と比較してどれだけ野蛮で、物騒で、過激だったとしても、基本的にはやっぱり学校という事実は変わらない。

学校、ということはやっぱりそこに通ってる人間も色々いるわけで、

人間も色々いるってことは、色々と言やかましい奴もいるわけで、
つまるところ妙に校則とかの細則にうるさいやつもいるわけで、
つまりどういふことかということ

「三分の遅刻ね、渚^{ナギサ}」

息を切らせて校門前まで到着した俺の前で、仁王立ちになる眼鏡の女子生徒が慄然とした様子で胸を張る。

「わたし言わなかった？ 今日始業式で、新入生の銃器登録もあるから在校生は通常の始業時間より十分早く登校、その際銃器の登録とWIDAの配布やるから、ちゃんと持ってきてそれまで発砲は控えるように、って。わたし連絡網まで回したわよね？」

「っ、っ、ああ……ちゃんと、名織ナオリから、聞いてるっ……」
心臓が痛いほど鼓動を打ってる。耳元で血流の音がうるさい。あれからずっと走り続けてた足は急停止に加熱して気持ち悪い。

「だったら！ どうして！ 三分遅刻してきた上！ 何発か発砲してて！ 副装備軒並み忘れてきてんのよ！」

突然の大声に周囲の人間が軒並み振り返る。中にはこちらを見て隠すことなく笑ってる奴もいる始末……って、ありゃ板橋か。後で殴ってやる。

息を整えながら、背筋を伸ばす。

「ふう……。だから言っただろ、委員長。ついさつき得体の知れない奴に追っかけまわされて、撃つしかなかったんだって。それに、撃ったって言っても別に弾倉マガジンなくしたわけじゃないんだから、そこまでぐちゃぐちゃ言わなくてもいいだろ」

「それはそれ、これはこれよ。仮にも学生NASなら追われてでも時間に間に合わせるぐらいの気概は見せなさい！」

んな無茶な。

……いや、案外学院側からしてみれば無茶でもなんでもないことかもだけど。実際、この学院は学生に発生したトラブルに対しては遠慮容赦が欠片も存在しない。

「だから悪かったって。まあ……副装忘れたのは言い訳できねえけど」

まあ散弾銃背負って来てたとしたら生きてここまでこれたか謎ですが。

はあ、と委員長がため息。柳眉を下げる。

「……ったく。そこはわたしがどうにかしてあげるわよ。まだ登録受付始まってないし、わたしが口頭で話し通しとけば向こうも

うるさく言ってこないだろうし」

「さんきゅ、委員長」

「わかつたら早く行きなさい。入って正面、外来玄関口横よ」

「おう」

片手をあげて軽く返礼した後、学生でこつた返す校門をくぐり奥へと向かう。ちらりと背後を振り返ってみれば、そこにはまた別の人間に向かって声を張り上げる委員長の姿。さすが前年度委員長。さっそく狩り出されて辣腕振るわされてるわけか。

御苦労なことで。

内心で呟き、在校生の長蛇の列を横目に見ながら正面玄関横の列へと歩を進める。と、

「……おや、どこかで見たような久しい顔がいるかと思えば、ナギではないか」

妙な尊大な口調で声をかけられた。

声の掛った方を確認してみると、列のかなり前方の方、大仰な仕草でこちらを振り返る男の姿。口調はいつそ清々しいまでの帝王口調で受ける印象は戯劇的。まったく、新学期早々あんまり顔を合わせたくない奴と会ってしまった。

「……………小春^{コハル}」

つぶやくように名前を呟き、周りへと眼をそらす。

相も変らぬダークネス爽やかフェイス、妙に裾のスタイリッシュな学校指定制服。浮かぶ笑みは春風のような顔立ちとは真逆の含みを持ち、広げる動作は、やけに大仰。

名前は隆生寺小春^{リウシヨウケン}。中学時代からの友人でそれなりに優秀な学生NASである。部活動もその他組織も同行したことはないはずなのに、なぜかこいつはことあるごとに俺を『仲間』と呼んでやまない。「ふむ……先程はずいぶんと委員長に絞られていたようであるが、遅刻かね？ 遅刻はいかんど、わが友よ。本日以外ならまだしも、新入生の前で無様をさらすなど、天下の学生NASとして示しがつかんではないか」

「うつせ。朝から追いかけてまわされて余裕なかったんだよ」

「追いかけてまわされた……？ ふむ、なるほど。いつものごとく事件に巻き込まれた、というわけか……」

「やれやれ、と小春が首を振る。二重三重に膨れ上がった列の、小春の横へと並び横から先頭の方へと割り込むようにして並ぶ。

「ふん。つくづく運のない男だな、お前という男は。新学期早々、それも登校間際にトラブルと出くわすとは 前世の罪状がよほど重いと見える」

「そんなもんがあるとしたら、この学校に入学した時点で不運は最高潮だよ」

くくくつ、と小春は喉で笑った。

「違う。我らの人生波乱万丈、その最高潮が今この学院、というわけか。……ああ、そういえばナギよ、聞いたか？ 今年は《公社》の中でなにやら動きがあったらしく、黒岬学院との学生交流がより強化されるらしい」

「へえ……」

黒岬といえば確か東北のあたりにある、裕に告ぐ第二のNAS養成国策学校だ。そことの交流強化。うむ、なにやら胸躍る響き。

「我らのリークした情報によると、どうも学生交換や転校措置なども取れるようになるそうだ。まだ確定ではないが、どうも向こうはこちら以上に乗り気で、すでに転校措置をとった人間を一名用意したらしいな。どのような人間かはネットワークの及ぶ範囲でないためにいまいちよくわからんが……女子生徒らしいというのは確かだな」

「相変わらず情報の早い奴だな、お前……」

「いやいや、それほどでもはっはっはっ」

わざとらしく快活な声を上げて、小春は笑った。

「でっ？」

「ずい、と小春の作りだけは一級品な顔が間近まで寄せられる。

「……でっ？」

一步、列からはみ出ない範囲で距離をとって

「今朝のナギに何があったのか、聞かせてもらえないというわけはないのだろうか？」

つもりだったのに、肩を掴んで引き寄せられた。

「……まさか、何も言うつもりがないと？ そんなわけはあるまい。ナギよ、お前は友人が危機的状況にあったことを知り刹那に肝を絶対零度まで冷やした友人に対して何も告げぬほど薄情な人間ではないはずだ。今なら俺の肝に近づけるだけでバラはバラバラになるだろう」

むしろ成長促進されそうな健康優良臓器の持ち主が何をほざく。

「そんな様子は欠片も見えないが」

「表情を隠すことに長けているだけだ」

「手先の色も冷や汗もないだろ」

まあ、実際そのあたりをごまかす術を持っていたとしてもぜんぜん不思議じゃないのがこいつという人間だったりもするのだが。まったくもってつかみ所がない。

「それに仮に心配してたのがマジだったとしたって、お前に話す義理はねえよ」

「義理はなくとも縁はあるだろう？ 少なくとも、ナギが現在進行形で活動中の『肝吸い』やら『フェイスクラッシュャー』などにまあまずあり得んだろうがやられたとして、俺が寂寥を覚えぬと思うのか？」

ええ、思いませんとも。てか何その恐ろしげな連中。そんな連中活動中なの？

ま、どうでもいいか。

「……正体不明の黒服がぶっ殺してるところに出くわして、そのままそいつに追われて逃げた。そんだけだよ」

さすがに面倒なので話の端っただけ話してやることにした。

ほう？ と興味深そうに小春が口元に手をやる。

「正体不明の黒服……とな？」

「ああ、全身真っ黒。追われて逃げてジャンプして遅刻した」

結局正体はわからず仕舞いで殺された学生が誰なのかもわからないままだった。何となくよった廃ビルの踊り場、そこにぶちまけられた紅と黄色と白と黒。壁に張り付いたそれは粘りをもって床に滴り、穿った穴へと溜まって落ちた。

見えた眼窩は滲んだ白で、

穿たれた穴は肉と骨と血と得体の知れない粘液とで、濡れていた。死体には慣れてるし、この手で人を撃ったこともある。ただそれでも他人の死体と言うものはこうもグロテスクに映るもんだ。と、言うか明らかに『銃殺死体』って死体見慣れてる方がなんかおかしいだろ。

「ふむ。興味深いな。殺害されていたのは当校の生徒か？」

「あの制服が偽装じゃなきゃな」

「殺害方法は？ 主に銃器の使用状況について詳しく聞きたい」

「どうして」

「犯人に興味があるからに決まっているだろう。で、どうなのだ？」

言われてちらっと記憶を探る。前衛芸術は忘れようがない、として殺された方、銃持ってたっけ？

「被害者の方はM1911（ガバメント）持ってた。口腔内に一発。黒服の方はよくわかんねえけど……たぶんオートマグだな」

「オートマグ？ それはまさかかの有名なるAM社のアレかね……？」

「別にTDEでもハイスタンダードでもAMTでもAMCでもいいけど、とにかく自動式でマグナム撃てるステンレスだ。それ以上は知らん」

そもそも俺は銃を使わない。一応校則で規定されている以上変に目をつけられたら面倒で、それにあって困るもんじゃないから持っているが、それ以上の目的はない。

小春の眼が、考え込むように宙へと泳いだ。

「ふむ……オートマグ、か……。はてはて、ガバを持っている人間

には無数に心あたりがあるが、さすがにオート『ジャム』となると心当たりはないな」

当たり前だ。天下のNASが自分の命預ける銃にあだ名になるほどジャムる銃使うかよ。と、言うかそもそも流通しているのかその銃。社名多いのも買収されたからだろ。

「そっか」

軽く言い置いて、列の周囲へと再び目をやった。

制服の雰囲気も真新しい新入生、一人ひとり形状や汚れ、痛みなどが一切異なる在校生。纏う気配からすべて異なる人いきれの中、去年は自分もこの中にいたのかと考えると、浮かぶ感慨もある。

生きるか死ぬかの日常、その最前線へ身を投じること。

その事実をちゃんと理解している人間が、どれだけいるのか、ふと疑問に思う。

「……………いないだろうな、たぶん。」

断言できる。おそらく中には例外もいるんだろうが、その例外はおそらく新入生百名ちよつとの中で一つまみ、十人もいればいい方だろう。

そしてその例外も例外じゃない一般も、卒業までに十人は命を落とす。

一般的な高校より一回りも二回りも野蛮で、危険で、それ故に社会的貢献度はほかの職業の比ではなく、卒業後の就職率も安定している、それが硯学院だ。

そして、俺と同じ奇々怪々な《能力》。

それを持っている人間も、おそらく

「はい、次の方」

「……………つと」

いつの間にか列の最前列、レンガ造りの校舎壁面直前まで来ていた。眼前にはすでに生徒会の長机、その後ろにずらりと並んだウエストポーチのような物体と、書類の山。真正面にはこちらに向けて

やわらかな笑みを見せる少女の姿。

「あ、隆生寺さん、穂村さん。^{ホムラ}おはようございます」

やわらかな眉尻、穏やかな表情。座った身長は見下げると称することのできるレベルのもので、女性としても相当小柄な方だろう。

「よう、七鳴。^{ナナリ}こんな日も生徒会働きなんて、やっぱ役員って大変なんだな」

「こんな日だから、ですよ。穂村さん」

銀縁眼鏡の向こうで、七鳴の目が穏やかに笑んだ。

「この後も入学式の運営、始業式での挨拶、登録銃器の情報整頓に新入生へのオリエンテーションなど、いろいろな仕事がかかりますから。今日はほとんど、休みなしになりそうなんですよね」

困ったものです、と七鳴は僅かに苦笑した。

「と、言うわけですので早めに登録しちゃいましょう。まずは隆生寺さんから、ですか？」

「ああ。俺とて緋鹿^{アカシカ}七鳴生徒会会計殿の手を煩わせるつもりはない。早々に終わらせて退散するでしょうぞ」

言いながらごとりと、と懐から取り出した拳銃を正面の長机へと置く。さらにその横へナイフを数本、弾倉が六本。ついでにどこから出したのか、大型拳銃までが並べられた。

「裕学院NAS養成科二年、隆生寺小春。使用銃器CZ100、40SW弾仕様。副装^{スロインク}備投擲用ナイフ六本、S&P;WM500。保有弾倉は呼び含め計六本。所属部活は手芸部だ」

「はい、メインがCZ100、ナイフが六本、S&P;WM500ですね。承知しました。では、使用WIDAは通常サイズで大丈夫ですね？」

復唱しながら手元の小型端末のパネルを操作していく七鳴。

「ああ、そうしてくれたまえ。むしろそうなるように調整しているのだ、それ以上のものを渡されても困ってしまう」

「ふふふ、確かに、そうですね。では、隣で更新済み電子生徒手帳と一緒に、支給WIDAの受け取りをお願いします」

「うむ、承った」

ではな、とその場を離れる隆生寺。

「では、次は穂村さん、お願いします」

「はいよ」

言われて全身をこそこそ探り、ありつただけの装備を机の上に並べた。

自動拳銃一丁、バタフライナイフ一本。それと予備弾倉が五本きり。小春と比べると少々火力が心もとない装備が、今の俺の所持品である。

「裕学院NAS養成科二年、穂村渚。所有装備ベレッタPX4、40S&W弾使用、予備弾倉五本。副装備バタフライナイフ一本と家にレミントンM870とM24だ」

「家に……ですか？」

「ああ。ちよつと持つてくるの忘れちまってな」

まあ忘れてなかったら今ここに生きて登校できてるか疑問だが。

「……えっと、困りましたね。私も穂村さんが装備持つてるのは知ってるんですけど、この場にないとなると」

「ああ、後で委員長が話通しといってくれるって話になってる。書類上はそれで問題ないだろ」

「あ、そうですね。それでしたら生徒会としては別に」

さらさらと手元のデバイスを操作し、何事かをちよこちよこ書き込み、

「……はい、登録完了です。隣で更新済み電子生徒手帳とWIDAの受け取りをお願いします」

「はいよ。仕事、がんばれな」

「はいっ」

にこやかな笑みとともにうなずきを返した七鳴を背後に、生徒会の受付を離れた。

x x x x

「だったら！ どうして！ 三分遅刻してきた上！ 何発か発砲してて！ 副装備軒並み忘れてきてんのよ！」

「ふう……。だから言っただろ、委員長。ついさっき得体の知れない奴に追っかけまわされてて、撃つしかなかったんだって」
「……………あ」

校門横、通りすがりざまに、眼鏡の先輩に怒られているその先輩の顔が目に入った。

どきん、と心臓が跳ねた。

何度か忘れようとも考えたことのあるその顔、だけどやっぱり忘れられずに何度も思い返し、そして結局忘れられないままにここへきてしまったその顔は紛れもない、あの日あの時あの時間にあたしの前へと現れたあの人。人生の中でも転機と呼べるような出来事、そのきっかけになったあの人顔だった。

「……………」
思わず、校門をくぐるうとしていた足が止まる。
声をかけるべきか、迷う。

話しかける。そう自分の半分が告げた。明日をも知れない学校、せつかく入学して接点ができて、その入学式の日にあえたんだ。ここで話しかけなきゃ、次のチャンスは消えてしまう。

話しかけちゃ駄目。そう自分のもう半分が囁いた。明日をも知れない学校だから、こんなところに自分を追ってまで入ってきた人がいたって知ったら、重荷になるかもしれないから。

欲に素直になれ。そう自分の感情が呟いた。貞淑は今時柄じゃないぞ。

貞淑を保て。そう自分の理性が語りかけた。貞淑を持ってこそ乙女、きつと彼も気づいてくれる。

半分が、もう半分が、感情が、理性が頭の中でぐるぐると論争する。どうやら半分は感情と、もう半分は理性と同盟関係らしい。今の少女らしく会話を望めと感情サイドが告げ、貞淑な前時代的乙

でもそれだけの関係にしては、ずいぶんと親しそうに話してたけど……やっぱり仲もいいんだろうか。委員だけに。いろいろと世話焼きっぱかったし、もしかするといろいろとお世話したりとかもしてるんだらうか。授業とか、宿題とか、お弁当とか、ひよっとすると朝起こしたりとか？

「いやいや、ないない……」

でもさつき『渚』って名前っぱいの呼び捨てにしてたし、そんなに深い仲でもないのに名前呼び捨てって普通しないよね。ということはそれなりに深い仲って事で、やっぱり背中並べて戦ったこととかもあるのかな……。

ちよつと、いやかなり羨ましいかも……。

「曆ちゃん！」

「うひゃあっ！」

後ろから肩を叩かれて、思い切り飛び上がった。

「おはよう、曆ちゃん！ 入学おめでとう！」

「……あ、」

後ろから姿を覗かせる色素の薄いツインテール、幼げな顔立ち、身長は女子の中では割と長身に入る私と比較するとやや低めで、見上げる視線はどこか小動物を思わせるそれ。

跳ね上がった心臓が、鼓動を治めた。

「……なんだ……織瑚オリコか。脅かさないでよ」

「ん……？ わたしそんなにびっくりするようなことしたっけ？」
唇に人差し指を当て考え込むように、織瑚は目線を宙へと泳がせた。

「いや、いきなり背後から声掛けられたらさすがにあたしでもびっくりするって……」

「あれ？ でも前に曆ちゃん、贄にえのみずみ之湖で鍛えられてるから大抵のことにはびっくりしないーって言ってた気がするけど」

「うっ……」

「そういえば早めに行こうってわたし言ったのに、ちよつと遅らせ

たのも暦ちゃんだったよね……。それに冬休みぐらいのときにも会いたい人がいるからって言ってたから」

ふっ、と織瑚の表情から悩みの色が消えた。

……なんだか、いやな予感がする。

「あ、そっか。そういうことなんだ」

にんまり、と織瑚は笑った。

「な、なんなのよその不敵なこと考えてますーみたいな目は……」

「うっん。べっつにー。……そっかそっか。あの永久凍土の暦ちゃんにもとうとう春がきたんだ」

「あ、あのね織瑚！ 別にあの人のことはそういうことじゃ」

「あの人？」

「っ」

しまった、と思った時にはもう遅い。

織瑚の薄い桜色の目に、生き生きとした光が宿る。

「ねえねえ、あの人って誰のこと？ やっぱり暦ちゃんが前から言ってた憧れの人？ 会えたの？ お話した？ どういう人だった？ 仲良くなれそう？ 彼女さんいるのかも聞いた？」

「っ……だから、そういうんじゃないって……」

「ねえねえねえねえ、どうだったの？ 教えてよ。わたし暦ちゃんの恋だったら応援するから！」

「こ、恋って そんなこと……あたしがするわけっ……」

頬が一気に紅潮するのがわかる。耳まで一気に赤くなってきた。

「とっ、とにかくっ。あの人とかそういうの関係ないのっ。それにだいたい、ただの憧れで……その、恋愛感情……とか、そういうのじゃないんだからね！ 勘違いしないでよ！」

そ、そう。これがあたしの本心！ 確かに一人で勝手に憧れたりして一緒の学校にまで着いてきたけど、それはこのご時世護身技とあらゆる資格と確実に就職できる利便性があるからで別に一緒に勉強できたらかもしかしたら色々教えてもらったりとか距離が縮めやすいからとかイベントとかで会えるからとかもしかすると告白と

かして恋人同士とかになれたりするかも知れないなんて考えてない
そう、考えてなんか……………

「……………暦ちゃん？ どうしたの、いきなりハバネロみたいに真っ赤になったりなんかして」
「うわあっ！」

のぞきこまれてた状態から、よろよろと三歩後ろに下がる。
にまにまと、楽しそうに織瑚は笑っていた。

「大丈夫。もし暦ちゃんが本気であの人のこと好きだったとしても、バカにしたりなんかしないから」

「つつつつつつ！ もうつ！」

織瑚のバカ！ もっつ、そんなんじゃないって言ってるのに！
肩を怒らせて正面入り口の方へ歩を進める。

もう織瑚なんてほっつといてちよつと早いけど体育館いっちゃおう。
確か養成科の新生は入学式前に銃器登録と学生証の受け取りがあるから、早めに並んで

「うふふ、待つてよ暦ちゃん！」

「待たない！ だいたい織瑚は普通科でしょ！ どうしてあたしにくっ付いてくるの！」

「わたしもお父さんから鉄砲持たされちゃったから。普通科の人も、鉄砲持つてたら登録しないといけないんだ」

「え？ そうなの？」

うん、と隣に並んだ織瑚がうなずく。

「そっか。あのおじさん心配性だもんね」

「うん。ほんとに困っちゃうよ」

やれやれ、とあきれたように織瑚が言った。

とはいっても、おじさんの言うこともわからないでもない。このご時世、いくら天下の裕学院に通ってるとはいっても、制服の違いで普通科だつてこともばれるし、学生だからって危険な目に合わないわけでもない。銃の一挺ぐらいは御愛嬌だ。

……………それに、あたしの面倒も色々と見てくれるし。

登下校ぐらいいは合わせて、おじさんのこと安心させてあげるのもいいのかもしれない。

織瑚とも小学生自体からずっと友達だったんだ。それだけで役に立つならそれに越したこともない。

「でも、織瑚に拳銃なんて使えるの？ ほら、前にあたしの銃試し撃ちしたときに、派手に転んでたじゃん」

「大丈夫だよ。ちゃんとわたしにも撃てるやつって渡してきたから」「ん、そっか」

なら安心、と内心で納得して、そういえばあたしの銃もあの人のに合わせたんだっけ、と再び思う。

……って、バカ。あたしまた何考えてんの。
再び赤面しそうになり、あわてて顔をそむけた。

「あ、鉄砲の登録って、どこだっけ」

「体育館。その入り口で、受付と一緒にやってるって話だったはずだよ」

「ん」

短く言い交し、ちらりと腕時計を見た。

入学式まであと少し。

学園生活の開始までも、あと少し。

……よしつ。

これで、あの人と同じ場所に立てる。あの人みたいな、誰かの命を助けられるNASになれる。

……がんばろう！

内心で決意を新たにし、意気揚々と体育館を目指した。

3・出会い 再会

x x x x

体育館入り口で銃器の登録を済ませ、体育館に並べられた新入生のパイプ椅子に座る。

時間的にはまだ余裕があるからなのか、至極一般的な構造の体育館内の、見える範囲に座っている新入生とその保護者の姿はない。織瑚の父親あたりの姿があってもおかしくないと思っただけ、どうも予想以上に早く着すぎていたらしい。

織瑚は普通科、私はNAS養成科。

学科が違えば座るところも違うし、それに場所取りとかもそれなりに重要になる今じゃわざわざ近寄って話しかけるのも面倒だ。

所在無く周りを見回してみても、席はまだ四分の一ほどしか埋まっていない。その埋まっている半分にしたところで、孤児や苦学生が多い養成科の人間がほとんど。他の学科や普通科、父兄なんかの数も、随分と少ない。

ちらりと壁の時計で時間を見る。

式の開始まで、あと二十五分。

あれ……？

そんなに時間、早かったっけ？ もしかすると予定違い？ 鞆からパンフレットとプリントを問います。

プリントによると集合時間はさっき確認した自分の時計で、今から約十五分後。式の開始はその五分後。場所は体育館内、着席して待機すること。

パンフレットによると、入学式の後には始業式も控えているらしい。

……あれ？

覚えた時間に間違いはない。腕時計で確認した時間は十五分前で、

着席待機ならそれなりの人間がいてもいいはず。なのに周囲はガラガラってことはもしかして

思いながら自分の腕時計を見る。体育館の時計は基本的に電波管理式だからもしかして

「……………あっちゃー」

ずれていた。

もの見事に、十分も。

なるほど、道理で人も少ない。式の開始まであと二十五分、一時間の半分近くも余裕がある。いくら余裕を見せて登校させる父兄が多いとはいってもせいぜいが十五分前。二十五分前は、さすがに早い。

どうしよう。

いきなり時間がぼっかり空いた。十五分程度なら校則の確認でもしければ時間つぶしになるけど、さすがに二十五分もの時間は広すぎる。

携帯電話は……………空中投光型だ。旧来のスクリーン、タッチパネル型ならこっさり使うこともできたかもしれないけど、投光型は目立ちすぎる。大体式典中は妨害電波ぐらい出してるかもしれないし、インターネット接続ができない以上、携帯電話なんてただの箱だ。

ほんとにどうしよう。銃の点検でもしてようか。

そんなことを考えながら妙に重いパイプ椅子に深く座りこみ、

「……………」

「……………?」

誰かの声が、聞こえた。

言い争うような声、揉めているかのような音。退屈してるいまでもないと気にも留めないような微小音声。左右を見回して発信源を探すと、半開きになった体育館の側面出入口。

「して！ 離して

！」

「だから と いるだろう！」

「には、……………でしょう！ だから

」

「…………しる！」

何を言っているのか詳しくはわからない。だけどなんだか空気が不穏で、しかもあまり收拾が着く雰囲気でもない。

第三者が首を出してもいいものか、少しの間考えて。

「よし」

なんとなく、ほんとになんとかなくその場を立って側面のガラス戸から外へ出た。

体育館正面のざわめきとは裏腹に、側面にはグラウンドを見下ろす芝生の斜面と並木道が静かに揺れているだけで特に大きなざわめきらしいざわめきは存在しない。だけどその空白ともいえるスペースには　　予想通り。言い争う男女の姿。

片や黒のブレザーを纏った銀髪の少女。体育館の壁面に背を押しつけられる形で、何やら言い募られている。

片やワイシャツに黒のスラックスを身に纏った紳士的な青年。優雅にはほほ笑みでも浮かべていればそれだけで女性を虜にできるであろう容姿なのに、今その表情に浮かぶのは醜い憤怒ともいえる形相だった。

一見した印象は、一方的な意見の押し付け。

もしくは、痴話喧嘩といったところだろうか。

「もう帰ってください！ 私なんかより、うちで待ってるアイリスの面倒を見て差し上げたらいかかなの！」

壁に押し付けられたまま気丈に叫ぶ少女に、覆いかぶさるように押し付ける青年は怒鳴り返した。

「そういうわけにはいかない！ どうして僕に黙って養成科になんか入ったんだ？ わかってるだろう！ ここがどういうところなのか…………」

「無関係なことです！ もうお帰りになってください！」

「無関係なわけない、カノン！ 僕はお前のことを考えて

「そんな身勝手な考えがあるとお思いなんですか！ 私のことなんていつも放っておく癖に、自分に都合が悪くなったらこんなことを

いい加減にしてください！」

「うるさい！ とにかく今日は帰るんだ！」

「あっ！」

壁際に身を押し付けられた少女の腕を強引につかんで青年が歩き出す。こつちとはちようど反対方向で姿は見えないけど、どうも様子が尋常じゃない。

事情があるにしても、これはやりすぎな気がする。

足元の段差を下って、男女の後ろに着いた。

「離して！ 離してください！」

「うるさい！ いい加減にしないと」

ヒステリックに言い放つ青年の腕が腰に伸び、そこにある金属物

あ、あれはまずい。

「あー、それちょっとやりすぎじゃないの、お兄さん」

気づいた時には思わず声を出していた。

……………やばっ。

思った時にはもう遅い。半ば脅すような速さで青年が振り返り、その視界にあたしをとらえる。

ヒステリックな目の色、荒い呼吸。体裁を取り繕うこともせず、

青年は感情のままに言った。

「……………何だ君は！ これは僕たちの事情なんだ！ 口を出さないでくれ！」

感情的に目を剥き言い放つ青年。だめだ、この様子じゃこつちの話なんて聞く耳もないだろう。やれやれ、いきなり面倒な人に行き当たっちゃったかな。

内心で思いながら、あえて挑発するような態度であたしは笑った。

「確かに、あたしもただの痴話喧嘩とか言い争いなら放つとくけどさ。でもさすがに『ただの喧嘩』で拳銃出すのはやりすぎじゃない？」

ピクリ、と青年の肩が一瞬震えた。

「どうやら凶星、そうあたりを着ける。実のところ分かっているのは腰に何か武器がある程度のこと、それが拳銃なのかナイフなのかそれとも他の何かなのかはわかってなかったりするのだが、まさかのドンピシャだったらしい。」

「な、何の話だ！ 僕は別に拳銃なんて……………」

「ふーん……………」

何の気なしを装いながら、青年に腕を掴まれたままの少女の方へちらりと目をやった。

「縋るような眼、困惑した表情。統括する感情は怯え……………ってところか。」

「やれやれ。まだ入学前だし、先輩とかに目えつけられたくないし、できることなら穏便に済ませたかったけど……………いざとなれば強硬手段も覚悟しなきゃな。」

「でもさ、これからあたし、入学式なんだよ。今まで中学生生活で受験勉強とかも頑張ってる、環境変わるってウキウキしてるわけ」

「そ、それが僕と何の関係……………」

「だからさ……………」

「とんつ、となるべく自分勝手な性格に見えるように表情を調整しながら一歩。青年へと間合いを詰める。ひらりとした拳動に青年の動きが一瞬、硬直し、」

「そんな日の、ドキドキしながら時間待ってる時に横から変に言い争うのとか聞こえたら台無しなんだよ。あんた、わかる？ 一生に一度しかない入学式のドキドキ、あんたのせいで全部台無しなんだよ……………」

硬直している青年の表情が、さらに強張った。

「我ながらなかなか理不尽な言い方だ。威圧するように間合いを詰めながら問いかけると、じりじりと青年が後退する。」

「しかも顔出してみたらわけのわからない一方的な言い合いってさ……………。なんなの、これ？ そんなに大事なことなわけ？ 拳銃まで……………」

持ち出して？ ばれたらみつともなく言い訳したりして？」

「そ、そそ、それ、は……………」

先ほどまでの剣幕はどこへやら、青年の顔色が一気に色を失う。いくら拳銃が大衆化したとは言え、発砲も特に制限されていないとは言え、さすがに誰かを脅迫する目的で使おうとしたことを知られると菊の御紋が黙っていない。最悪の場合殺意があつたと認識されればN A Sが動いてもおかしくないのだ。

ついでに言えばここはN A S教育の総本山の中の、入学式直前の体育館の、横。場所として都合が悪いことこの上ない。

そしてとどめと言わんばかりに、あたしは制服から見えてわかるとおり新入生と言えども学生N A S。どれだけの実力、権限があるか、あたしにもわからないのに、完全に部外者である青年に理解できるわけもないだろう。

内心の昂揚を抑え、極力そつけない態度を装いながら、あたしは言い放つ。

「言い訳はいいよ、さっさと消えて。別に今時拳銃なんて珍しくも何ともないし、あたしとしては不快な音が消えたらそれで満足なわけ。別にそれ以上頓着するつもりもないし、そんな時間もないからさ」

「あ、ああ…………。そうする。おいカノン」

「あとさ」

少女の手を引いて立ち去ろうとした青年が、再び止まる。

「あたし、自分のクラスメイト一人も減らしたくないんだよ。これから入学式だし、中学のころも何人が減っちゃったし、せめて高校ぐらいはって思ってるんだけどね。そこでお兄さんが連れてっちゃったら台無しになるんだけど」

少女の表情に困惑が浮かぶ。

「ちらり、とその眼に青年にわからない程度の微笑みを返すと、青年の表情には葛藤が見て取れた。

「…………つ、それはうちの事情だ！ そつちの事情じゃないだろ！

カノン　この子だって僕がちゃんと話せばわかってくれるはず

「あーもう、ごちゃごちゃうっさいな」

あからさまに苛立った声を出す。青年の身がぎくりと背後に下が
り、かき集めてきたであろうなけなしの勇気をへし折った。

「いい？　あたしは別にそっちの事情なんて知ったこっちゃないの。
別にその子が病弱で養成科に耐えられないとしても、家庭の事情で
学費とかいろいろ大変だったとしても、単にお兄さんが個人的にN
AS嫌ってるだけだったとしてもさ、」

なるだけ酷薄に見えるような表情を心掛けながら、青年の顔を覗
き込む。

「あたし、そんなの知ったこっちゃないわけよ。さつきから言っ
てるでしょ？　あたしは、あたしが気に入らないからここにいて、あ
たしが気に入らないからやめる、って言ってるの。わかる？　わか
るかな？　……わかるよね？」

「あ、う……、それは、」
尻すぼみに青年の声から覇気が消えていく。

何度か同じ手段を使ったからわかる。おそらく、今の青年の心中
は葛藤の渦だ。この子を連れ戻したい、だけど一番まずい瞬間を見
られた人間が連れ戻すなど言っている。だけどここで自分も引き下
がるわけにはいかず、だからと言ってこの場で強硬に主張したとし
て、自分の身が危くなる。

是か、非か。どちらを選んでもリスクを払うことになるその選択
肢に、青年は、

「っ、………わ、わかった………」
がつくりとうなだれたまま、握りしめた少女の手を離す。

あれだけ言い募ったのに、結局とつた選択肢は自分の保身。身勝
手な行動に辟易しつつ、しかし表情だけは無感動を装って一歩、青
年から距離をとった。

「だけど！　僕は諦めたわけじゃないからな！　僕はこんな学校に

お前が入学するのは認めない！ 絶対だ！」

「……………そう、ですか」

ポツリつぶやく少女を残し、ぼやくように捨て台詞を残し、青年が体育館裏から駆け出していく。

残されたのはがっかりと頂垂れる銀髪の少女と、あまりの潔さに呆然としているあたしの二人。

そのまま何もしないというのも何だったので、少女の顔を盗み見た。

きれいな顔だ。日本人離れした、完全に西洋人であろう顔立ち。

やや伏せられた目は碧眼、背に流れる長髪は月光の銀。肌は抜けるような白さで、体格もすらっとして恰好よく、そのくせ出るべきところは出るので 何というか。

……………羨ましい通り越して憧れちゃいそう……………。

羨ましいとか、妬ましいとか、そういう身近で手が届きそうだからこそ抱く感情を超越したような何か。口調も立ち姿もどこか品があつて、印象的には『綺麗な人』というよりは彫像とか、絵画とかの印象 ちようど『人じゃない何か』の印象に近い。

ちらり、と腕時計を確認する。

あれから、五分ちよつと。入学式まではあと二十分弱の時間がある。

そろそろ体育館も、込んでくるころだろうか。

「……………あのさ」

「…はい？」

おずおずとかけたあたしの声に、少女が顔をあげた。

うわ、眩しい。表情はなんだか暗い感じで、吹けば飛ぶような儚さがあつて、でもそのバランスが幽玄の美って感じで綺麗で よくわからないけど、一瞬気圧された。

「入学式、出るんだつたらそろそろ体育館入ったほうがいいよ。そろそろ席も込んでくるころだろうし、知り合いとかいるんだつたら席取つとかないと変なとこに座る羽目になるし」

「あ もう、そんな時間ですか……」
「どうしよう。」

蚊の鳴くような声で、少女が呟いた声音。どこか寂しそうで、どこか辛そうで、どこか諦めがたい。そんな感情を孕んだ、聞こえるか聞こえないか程度の呟き。

なんとなく放っておくのも悪いので、少女の手を引いた。

「あつ……何を……」

慌てふためく少女をそのままに、体育館側面から正面へと回る。

体育館正面は……あたしが入った時とは違い、ちよつとした規模の列ができていた。行列と呼ぶほどではないけど、用がない限りはまず並びたくない程度の列。どうやら予想以上に入学式というものは早めに集合するべきものであったようだ。

列の後端に半ば押し込むように、困惑した表情の少女を並ばせた。

「……………あ」

その時点でようやく自分がどこに連れて行かれたのかを理解したのか、少女の表情の中に混乱が混じった。

「あの、私は」

「あなた、ちゃんとこの学校自分で選んだんでしょ？」

「え？」

「だからさ、あれだけ反対する人がいるのに自分でここに来たいって思っ、受験とか武器とか制服とか、色々揃えたんでしょ？」

「え、あの はい……………」

「だったら胸張りなよ。あれだけ反対されてんのに自分で行きたいって思っただ将来の道決められたんだからさ。あの人がどういう人かは知らないけど、大事な人なんでしょ？ 反対されるってわかってながらそこまでやるって、すごいじゃない」

きよとん、とした表情で、少女がこちらを見つめ返してくる。澄んだ眼、捻くれるでも怨むでも、ましてや憎むでもない純粹な色の目。なんだか、織瑚によく似ている。

「そこまでやったんだから、別にあの人の意思ぐらい無視したって

いいと思うよ。将来なんてもともと自分のなんだし、他人にとやかく言われたって変えなくてもさ」

「……………そう、でしょうか…」
その問いかけはどっちに向いてるんでしょーねー。内心で思いながら、うなずいた。

「そーそー。ま、他人の事情知らずに色々勝手言ってるだけだから失礼なこと言ってるかもだけど、ま、話半分に聞いといてちょうだい」

言いながらちらりと再び時計を確認する　　うわ。そろそろ戻らないと席が本格的に確保できなくなってくるかも。一応鞆はおい説いたけど、できることなら混む前に座つときたい。

「じゃあ、あたしはそろそろ入学式に戻るからさ。ここまで言っていてなんだけど、最後は自分で決めて貰うしかないわけだし……………あとは自分でどうにか考えてよ」

ま、ここまで連れてきたら実質選択肢は一つしかないわけなんだけど。あたしもなかなか悪^{ワル}だったってわけだ。感情と半分があたしにそう告げる。

列に背を向け、体育館側面の出入り口へと足を向ける。今気づいたけど、足元が上履きだ。入る前にざつと磨いとかないと、入学式前に教師陣に目をつけられかねな

「あ、あのー！」
い、と急ごうとしたところで背後から呼び止められた。

やっぱり、迷惑だったのだろうか。あの人とどういう関係にあるかは知らないけど、それにしたって第三者が説得に関連するのは筋違いだったかもしれない。

やっちゃったかな、そう思いながら振り返り、
「もし……………その、中で会えたら…お友達になっただけですか？」
……………はい？

予想に反した要望、それも随分とかわいらしいそれに、思わず硬直した。

「いや……友達も何も、これだけ縁作つといて友達も何もないと思うけど……違うの?」

「あ、はい!」

その一言に、少女の表情が一気に華やぐ。

思わず苦笑し、あたしはその少女に向かって軽く手を挙げた。

「じゃあ、中であつたら友達つてことで。縁があつたら、また会おうついで、と手を振って体育館の側面出入口へと軽く駆け出す。だいぶ混んできたし、式の間も近付いてきた。もしかすると、もう側面の出入口を閉められたかもしれない。

ちらり、と背後を振り返る。

遠目からも目立つ銀髪は、列から離れていなかった。

x x x x

武器の登録が終わり、先に待ってた小春と合流して教室に向かう。新入生は、そろそろ入学式のために体育館に入場しているころ。

在校生の俺たちは一度HRで連絡事項その他を伝達してから始業式に向かうことになっている。

当然のことながら、HRに欠席すれば始業式も欠席扱い。

そしてこの学院における無断欠席は、軍律破りと同じ程度の重さを持つている。

そんなわけで、たとえ始業式だけしかない今日とは言えど欠席者は一人もなく、むしろ刑罰を避けたい俺のようなサボり組の法が率先して登校するという構図が完成し、俺たちが武器登録を終えて教室に入ったころにはすでに半分ほどの席が埋まっていた。

席順は特に決まっていなくて、埋まり方はでんでバラバラ。

適当に窓際の席に腰を下ろして俺に気付いた去年から続投のクラスメイトを適当にあしらうと、もはや定位置といわんばかりに小春が隣の石へと腰を下ろしてくる。

「ふむ……。どうやらクラスのメンバーに大きな違いはないらしい

な

「そうかあ？」

言われてざっと見回してみる。半分ほど埋まった席にバラバラに座り談笑に興じるクラスメイト。確かに顔ぶれは去年も一緒だった連中が多いような気がするが

「よくわからん」

俺のその一言に、小春が呆れたようなため息をつく。

「そんなところだから常に情報で遅れを取って今朝のようなことになるのだ。いかなあ、ナギよ。常に事情に通じておらぬようではこの先生が残ることは困難を極めるぞ」

「……………今朝のことは別だろ」

それ以外特に否定はしない。と、言うかなんとなく気分で足向けた廃ビルで殺人事件なんて誰が予想できるんだ。

「そのあたりも含めて、だ。危機管理能力がなっていないようだな、わが友よ。……………どうだこの際。いっそのこと我らが手芸部に入部し、諜報技術や先見の明を鍛えるというのは」

「遠慮」

なぜ手芸部で先見の明はともかく、諜報技術が鍛えられるんだ、という突っ込みはスルーする。この男のことだ、ただの手芸部を諜報機関に改造していたとしてもおかしくはない。

「ふむ、それは残念」

全然残念そうじゃないにこやかな笑顔で、小春はゆるゆると首を振る。

「では、もうすぐ判明するであろう交換転校生の話はオフレコ、ということにしておこうか。何、焦らずとも始業式後にわかる情報だ。特に気にする必要もなからう」

それは挑発のつもりか？ 心中で小春に問いかける。

言っとくが、俺は転校生なんぞに興味はない。どうせ来たとしても俺みたいな普通組じゃなく、生徒会メンバーやら学院代表生やらのエリート組。関わり合いになることもまずないだろう。

とにかく、無視だ無視。新学期早々、余計な情報耳に入れて棒に振るつもりなんてさらさらないと、思っていたのに。

「おお？ さっすが隆生寺！ 俺らじゃ手に入らないようなマル秘情報、さっそく手に入れてきましたってか！」

軽薄でやけにハイテンションな声がいきなり教室内に響き渡った。耳に覚えがある、どころじゃない声。その声の主を探るべく教室内を一瞥

するまでもなかった。

「……^{イタバシ}板橋……」

「よう、穂村、隆生寺！ 久しぶりだな！」

小春の背後、俺の隣。ちょうど机の列一つはさんで向こう側。そこに立った軽薄そうな印象の男子生徒。声の発信源は間違いなくそいつ。俺にとつてよろしくないタイミングで話しかけてきたのもそいつ。校門前で笑ってやがったのもこいつ。

「あ、そっぴや穂村お前校門前でずいぶん委員長に絞られてたよな！ 新学期早々ついてねアダツ！」

「おっと、悪い。つい手が滑った」

「そんな手の滑り方があるかっての！ てか手じゃなくてさっきの足じゃね？」

「うるさいなあ……。手だろうが足だろうが打撃もらったのは変わねえだろ」

「打撃つてとこは認めるんですけどねグハツ！」

やかましかったのでもう一回蹴りをお見舞いした。

きれいに鳩尾に決まったらしく、悶絶する板橋。

「……ナギよ、相変わらずのロングレンジキック、見事だな」

首を僅かに傾けて俺の蹴りをきれいによけた小春が呟くように言う。

「お褒めにあずかり光荣……ってか？」

ゆるーっと板橋の鳩尾から足を引っこ抜く。ぐふっ、と重い吐息

を漏らし、直撃した鳩尾を摩る板橋。

「ぐっ………春休み中にまた蹴りのキレあげやがったなこの野郎……っ、まあ、それは置いといて、だ」

ちっ、回復の早い奴だ。

身を起こした板橋がダメージを感じさせない様子で、笑みを浮かべる。

「どうなんだ、隆生寺。お前んとこのネットワークから流れてきた情報によりゃあ、どうも来るらしいじゃねえか」

「何が」

「何がってお前 話の流れからして転校生のことに関わってるだろ！」

いちいち大声を出すな。目立ってるぞ。

満足そうに、隆生寺は含みある笑みを浮かべる。

「我がネットワークの情報制度が確たるもの、と仮定した場合、おそらく来るだろうが、さてさて、詳細はどうなっていることやら」

「なんだよ隆生寺。教えてくれたっていいだろう？ 別にあと十五分ちよいでわかるようなことなんだしさ、隠しとく必要ななんてないだろう？」

くねくねするな、気持ち悪い。

「ふむ……板橋よ、情報というのは鮮度が物を言う。たとえ十分後にわかるような事実だからといって、その事象の情報的な価値が低下するものではない。我らの職場を見るがいい。十分後にわかる情報で命を落とした人間がどれだけの数存在するか……」

「えー、いーじゃんよー別にー。せっかく春休みあけて生きて再会できたんだろー？ その記念ってことで口八でいいじゃんかー」

いいわけがない。小春の性格のことだ、情報の有用性は云々の哲学で暴利をふんだくるに決まってる

「ふむ、確かにな。それもいいかもしれん」

……わけでもないらしい。

「やたつ！　で？　で？　どうなんだ隆生寺。どんな人？　男？
女？　ひよつとして美人だったりする？」

「まあまあ、そう急くな。さて　どこだったかな」

懐から取り出した手帳をぱらぱらとめくる小春。生徒手帳ですら電子化されているこのご時世に、なんとアナログな。紙媒体の手帳はもはや滅びたかと思っていたが、それでもなかったらしい。

「……ふむ、あつたぞ」

「どうなんだ？」

身を乗り出して小春の肩越しに板橋が手帳を覗き込む。

その動作を、小春は手を振ってさえぎった。

「おつとそれはいただけいなあ、板橋よ。俺の手中にある手帳の内部には普通であれば歯牙にも掛けぬような瑣末ことから公社の上層部しか知りえぬような秘匿事項まで種々多用、迂闊に第三者の目に触れさせていいような代物ではないのだよ」

「ちえー」

「まあそれはともかく我らがリークした情報を読み上げると、だ。

すでに存在だけは噂になっている転校生、名は時際トキマキ萌木、国立黒岬学院NAS養成科より登録の公社公式認定Aランク学生NAS。年齢は我らと同じ年で身長は154、体格は平均値よりもやや細身だな。戦闘スタイルは近中距離での戦闘に特化した攻め手タイプ、協調性勉強実践成績とすべて文句なしのいわゆるステレオタイプな優等生、ただしタイプは委員長とは真逆で融通も利く、と……。今回の転校は黒岬側からの招聘のようだ。一言で言うなればエリート、ただし本人に優等生意識は希薄であり、そのため周囲からの人望も高く、状況判断能力にも一角のものがあ、それ故リーダーとしての素養に恵まれる……」

「で？　肝心の性別は？」

まじめ腐った顔で聞くような事か？

「お前にとってはうれしいことに　女のような」

「いよっじゃー！」

跳ね上げるようなガッツポーズ。遠巻きに眺めている男子連中からも結構な歓声上がり、にわかに教室が沸き立った。

満足げな笑みを小春は四方の男子へと向け、

「…………ご満足いただけただようだな、板橋よ」

「ああ！ 転校生！ エリート！ それも気取ったとこのない女の子！ 最高じゃねえか！」

「どの辺がだよ…………」

と、いか所もその転校生にしたって、うちのクラスに入ってくるとは限らないだろうが。ここまで喜んでいざ来たら隣のクラス、なんて糠喜びもはなはだしそぞ。

「安心したまえよ、ナギ。その杞憂は杞憂のままに終わる。配属先は間違いなくこのクラス、本日付で登録箇所が正式に黒岬から間へと移譲される」

「頭の中覗いたみたいなの解説ありがとう」

ちなみに登録箇所の移譲、という言葉は間違いでも誇張でもなく、正式な呼称、学生NASはそれぞれのNAS養成科に籍を置く学生であると同時に国家承認殺害者統括公社……通称殺人公社に登録されているNASでもあるため、こういう言い方になるらしい。

「で？ 具体的にはどんな奴なんだよ。お前のことだ、顔写真ぐらい手に入れてるんだろ」

よくぞ言ってくれた！ と騒ぐ板橋は無視した。

「ふむ、気にならないのではなかったのかね、ナギよ」

「うっせ。ここまで聞いて顔だけ知らん、つてのも変だろ」

どうせもう乗りかかった船みたいなもんだ。最後の最後まで知っていたほうが向こうと折り合いつける意味でもいいだろ。

内心を悟ったのか悟らなかつたのか、やれやれと小春は首を振った。

「律儀なものだな、わが友。まあ、それでこそわが友足り得るのだが」

「嫌みは結構だ。で結局あるのかないのか」

「嫌みのつもりはなかったのだが……。まあいい。わが友よ、友人価格として特別の情報を教えよう」

「ちよいちよい、と手招きする小春に従い、顔を寄せる。と、小春は手帳を閉じ、耳元へ顔を。」

「顔をあげてすぐ、黒板をゼロとして右方向に四十五度だ。とびつきりの情報がお前を待っている」

「……………」

「なんだそりゃ。」

疑問符を解消する暇すら与えられず、小春は早々に俺から離れ、再び手帳を開く。

「おいおい、小春！ まさかもう顔写真まで入手してんのか！」

「もちろんだとも。……………どうかね板橋。この特級のネタを一本でどうだ？」

「ぐっ……………。一個なら即答で拒否するところだが一本……………っ、一本だと……………？」

「フハハハハ！ どうするかね板橋および聞き耳を立てている学友諸君！ なーに、現在ここに集っている学生の人数は延べ二十八人、頭割すれば一本も0・035本に早変わりだ！ さあ……………どうする？」

……………あほらし。

あと十分ちよつとで否応がなしに突きつけられる現実、それをどうして金出してまで早めに知ろうとするのかね。

理解不能、その言葉を脳裏に、教室の騒ぎから顔を背け黒板に目をやる。片手間に視線を動かす。黒板ゼロ度、そのまま右に、四十五度。

教室を覗き込んでいた女子生徒と目が合った。

「え……………っ？」

瞬間、

時間が

凍りついたかのような

異様で

異常な

感覚の中に

放り込まれたような

感覚さうかくのような

錯覚かんかくの中に

放り込まれた。

藍色みがかつた黒のセミロングヘア、端正な顔立ち。ポニーテール気味に纏められた髪をさらりと揺らし、いたずらっぽく微笑むその顔にかつての過去を幻視する。鳴り響く古めかしい時計塔の鐘の音、快活に遊びまわったその後の夕日、あどけない笑顔に無邪気な横顔、夕日に照らされた日々の中、最後の記憶は曇天。二人一緒に門から出て、そのままずっと離れ離れ。約束も言葉も何もなかった別れたその少女、名前は

「……っ」

椅子を蹴倒さんばかりの勢いで席を立ち、廊下へと駆ける。

「あ、おい穂村」

背後で何か板橋が言っている。が、今は気にしている暇はない。今の顔、間違いない。思い出した。数年前孤児院で別れてそのまま会うこともなかった幼馴染。快活でしっかり者でなんでもできると見せかけて陰で努力してて、でもメンタル弱くて隠れてよく泣いたあいつ。

あいつが、ここにいます。

その事実が遠慮も容赦もなく体を突き動かす。もうすぐ会えるとか、そんなことは関係ない。今、今俺は思い出した。だから確かめる。それだけのこと。

教室のドアを開け放つ。廊下へと身を躍らせる。

すでにHR間際の廊下、遅れてやってきたもの、廊下でよそのク

ラスメイトと雑談に勤しむもの、真面目な顔で手に入れたばかりの銃器をひけらかしているもの、さまざまな人間がそこにいる。

その中、廊下の窓際に

……いた。

凭れかかって、ただ漫然と時間をつぶすように。

あるいは、何かを待っているように。

ぼんやりと、あるいは真摯に天井を見上げる、その姿。

碯の制服、成長した見た目、それでも間違えるわけがない。この気配、あのプロフィール、間違いなくこいつはこいつで、数年の時が経った今でもこいつはこいつ以外じゃなく

「……よう」

ためらいなく声をかけた俺に、そいつが顔を上げる。

「……久しぶりだな」

覚えているか否か、多分覚えているだろう。出なきゃ、あんなことするわけがない。

俺の呼び掛けに顔をあげた転校生のその少女はゆつくりと顔をあげ、

「……ふふ」

そして上品に、微笑んだ。

「久しぶり。そうね、だいたい三年ぶり、ってどこかしら？」

壁から身を軽く跳ね上げ、こちらに歩み寄る転校生。

「ホント、久しぶりね ナギ」

俺はそいつの、転校生の少女の、かつての幼馴染の、トキングミモエキ時際萌木の投げかけたその声に、

「……ああ」

ゆつくりと、うなずいた。

これが、始まり。

殺すまいと生きていた俺が飛行の末に巻き込まれ、のちにもっと

面倒なことに巻き込まれざるを得なくなる予兆。

後になってから、俺は思う。

このとき幼馴染を追ったりなんかしなければ、

もっと、ここから先の出来事は変わったんだろう、ってな。

4・先輩

x x x x

「カノン？」

「はい。名前はカノン、姓はクレスウエル、スペルはCanon」
Cresswellでイングランド生まれの、人種的にはイギリス人になりますね」

「へえ……………」

……………日本人離れしてると思ったら、ほんとに外国人だったんだ。内心で嘆息し、改めて銀髪の少女、カノンの体型を見てみる。

言われてみれば確かに納得。銀髪碧眼なんて日本人じゃまずあり得ないし、あつたとしてもアルビノみたいな先天的な病気。肌も白いとはいっても、死人みたいな病的な色じゃなく綺麗な生き生きとした感じで、病気とは無縁に思える。

ついでに言えば、女性の象徴的な『部分も 人種の壁を感じさせた。

ため息一つ、廊下を歩きながら自分の、その……………あんまり凹凸のない体型を見下ろした。

間違いなく勝てない。比べるまでもない、というか比べたくない。そう、相手はアフロディテ。敗北することに責任はないでも、へこむことは避けられるまい。

入学式とそれに続く始業式もつつがなく終わり、生徒手帳の受け取りに向かう最中、なんとなしに理不尽を感じながら、廊下へと意識を戻した。

本日の予定、終了。

できることならすぐにも織瑚と合流して家に戻りたいところだけど、今日はこの後学生証の配布がある。

この学校の生徒手帳は完全電子制御の情報端末で、手帳というよりは超小型端末の仕様。学内外を問わないサーバーへの接続機能に各個人情報補完機能、公社から回される依頼の受諾など、もはや一個人で持つ端末の域を逸脱しているかのような代物らしく、入手にはそれなりの手続きを踏まなければならない。

一応、入学式が終了した今であればどの学生窓口でも受け取りはできるらしい。

が、あたしはまだ校内の詳しい構図を知らないし、学内の間取り図も配布される生徒手帳の中、入学式のパンフレットに記されているのはHR教室までの道順のみで、受付はHR教室でも受け付けている。

つまるところ学校側が用意した必然に乗る以外、あたしたちには最初から選択肢が用意されていなかったわけだ。

「そっぴゃ、カノンって何組なの？」

いくら国策学校、色々普通の学校と違うとは言ってもこの辺は普通だ。実技授業、団体演習、順列競争の原理。そのあたりを加味してのクラス分けらしいけど、こっちからすれば同じだ。

「えっと、確かA組だったと思います」

「あ、じゃああたしと同じじゃん」

あら？ とカノンが可憐にほほ笑んだ。

「では、一年間同じクラスになるわけですね。改めましてよろしく願います。せつかくなれたお友達なんですから、お互い頑張りましょう」

いや、そこまで丁寧に言わなくてもいいって。

内心でのつぶやきを苦笑に代えて、あたしは曖昧に頷きを返した。

「こちらこそ……ってね。あ、そっぴゃえばカノン、放課後に何か、用事ってある？」

「放課後、ですか？ いいえ、特にありませんわね」

「おっけ。だったら、あたしらでどっか出かけない？ 普通科に友達いるんだけど、その子も一緒に」

「普通科の、お友達……ですか？」

「うん。昔からの幼馴染みたいなもんで」

まあ、出会い方は色々和普通じゃなかったけど。

いまいち感覚の薄い左手を、頭の後ろで組む。

「人見知りとか全然しない、いい子だよ」

「まあ……。信頼し合ってらして、うらやましい限りですわね」

上品に口元に手を当て、カノンはほほ笑む。

「でしたら、僭越ながら私も一緒にさせていただいてよろしいでしょうか？ 家の者も、御学友と一緒となると苦言は出さないですよっし」

家の者ってことはやっぱりそれなりにお金持ちなのね……。織瑚の家も体外だったけど。

「いいよー。あたしも織瑚も大歓迎！ 向こうも友達ぐらいできてるだろうから、にぎやかになるかもね」

「ふふふ、お二人とも社交的でいらっしやるのですね」

そう？ と身をひるがえして階段をのぼりながら、どこか羨ましそうな笑みを返すカノンを見下ろす。

階段の上はHR教室の立ち並ぶ一角だ。

すでに多数の新生がいるのか廊下はかなりごった返しているらしく、階段下からでも音だけでかなりの雑踏になっていることが容易に想像できる。慌てて階段を駆け上ってみれば

「あっちゃー……。ゆっくり来すぎたかな」

「混んでますか？」

「雨後の雨露ぐらいにはね」

新生生だけにしては妙に多いし騒がしい……と思ったら、どうも在校生が部活動誘だとか色々に動いているらしい。生徒手帳確保に来た新生の中に在校生が混じって、さらにはあっちこっちで勧誘やってるから余計に雑踏が拡大してるらしい。

まあ、のんびりした時間は嫌いじゃないし、人込みは嫌いでもなんでもない。せっかくの入学式の雰囲気だ、全身で味わうとしよう。

「わわわわ……暦さん、人が、すごいです……」

「ははは、こっちこっち。かき分けてくよ」

人込みの前でおろおろしてたカノンの手を引き、廊下を半ば以上ふさいでいる人込みへ突貫する。

「『剣術部』 部員募集中です！ 精神鍛錬実用兼用」

「音楽大好きな人、『吹奏楽部』募集中です」

「学生『^{クラス}集団』、『多摩浜学芸団』と一緒に働きませんかー！ 只今体験入団期間なので」

「さあさよつてらっしやいみてらっしやい！ 我らが『手芸部』は新入生の来訪を歓迎するっ！」

「柔よく剛を制す。『合気道』こそ次代のNASに必要な技術だ！
護身を尊ぶ新入生諸君」

人と騒音、張り上げる声と足を止める人間、先を急ぐ人とのんびり行く人。雑踏とはすなわち混沌、そこにいる人間が混沌としていれば雑踏は自然と生じ、混沌が加速すればさらに大きくなる。

カノンの手を引いたまま雑踏を強引にかき分け、教室前へと歩すすむ。あたし個人でならもう突破できてるのに、やはりというか重いのはカノンだ。

「あ、その銀髪さん！ 演劇部！ どうですかー！」

「え、あの、私は」

「いやいや、ここは舞蹈部！ 気品あるし美人だし、どう！」

「あ、私踊りとかちょっと」

「ぬ、その御仁！ 護身のために合気を極めては」

「いえ、護身術は私もう」

四方八方からかけられる声、半ば押し付けられるような勧誘用のビラ。手をひかれることも足を止められることも二度や三度ではない。まるで重りを引いてる気分だ。人込みの中、手中の荷物は重くなる。

そんなわけでもたよたと強引に人込みをかき分けながら到着したA組の教室内に着いて、あたしたちが最初にやったことは、とりあえず大きく息をつくことだった。

「……………凄かったね」

「……………はい。これ、どうしましょう」

「……………捨てちゃって、いいんじゃない？」

手元を完全にふさぐほどの量のビラ。配る方も新入生の中に見つけた白金を逃すまいと必死だったようだ。

やや乱れた髪を適当に直し、教室の中へと目をやる。

NAS養成科とはいっても、教室の造りはそれほど大きく違わないらしい。教室にやってくるのがやはり一番の多数派なのか、教室のあちこちに所在なく雑談などに勤しむ生徒の姿がちらほらと見える。

やはりというか、初対面の人間が多いらしくそれほど話は弾んでいる様子はない。

NASになるような人間は基本的に何かわけありの人間が多く、僅かなわけなしの人間は大抵の場合わけが多いという事前情報のせいで距離感を感じ、結果として学科全体で湯人グループが成立するのが遅い傾向がある。

今日が初対面、HRすら存在せず、自己紹介すらない邂逅。

距離感が生じるのは、当然だ。このご時世、以前なら容易に乗り越えられた人と人の境界を乗り越えるのは容易ではない。けん制し合うような警戒心、思惑の裏を読もうとしているかのような猜疑心が、教室内でせめぎ合っている。

どことなくピリピリした空気の中、空気に飲まれるように困惑が脳内を支配する。

「……………なんか…お見合い会場みたいだね……………」

「と、言うよりは開始直前の試験会場みかたのようですね……………」

確かに言ってる。合格だと確定するまで競争相手かどうかが警戒してる構図なんて、そっくりだ。

……ピリピリした新学期になりそう……。

これから始まるであろう新学期の構図を予想し、思わず気が滅入った。もともとそれほどクラスには期待してなかったとは言え、これはさすがに予想外。

「ところで…学生証の受付はまだなんでしょう？」

「ん〜？」

言われてみれば確かに学生証の配布が行われている様子はない。てつきり各教室の前で配布手続きを行っているものとばかり思っていたけど、教室の様子を見る限りそれもない。ならほかの教室で…と思っただけど廊下のあの喧騒の中にそれらしい個所はなかったし、そもそもあの場に教員が存在したのなら、あの騒ぎを事前に止めているだろう。

念のため、再びパンフレットを確認してみる。

うん、間違いない。『学生証の配布は学生課、および職員室、購買部、総務課学生係において行うものの、入学式当日のみHR教室においても配布手続きを受け付ける』。パンフレットにも確かに書いている。

でもこの有様を見る限り到底配布は行われている様子はない。

だとしたら時間がまだなのか、あるいはもう終わってしまったのか、そのどちらかだと思っただけだ。

「カノン、なんか聞いてない？」

「え、っと。先輩の話だと、確かにHR教室でやってるらしい、です…けど…」

「先輩？」

「はい、昔からお世話になっている方が先輩にいらっしやるんですよ。その方にも先程連絡してみたんですけど…」

ゆるゆる、とカノンは首を振った。

うん、だとしたら奇妙なことになった。一体学生証はどこで手に入るんだろ……。

と、

「ふふふふふ……。やっぱりね。例年通り、ずいぶんな数が罨にかかっているわ」

「っ！」

ひどく楽しそうに笑む、猫のような甘い声。

突然横からかけられたその声に、思わずその場から飛び退く。後先考えずに飛んだせいで机に激突、意外と重くてなぎ倒さずにちよつとずらして床に倒れた。

「あ、暦さん！ 大丈夫ですか？」

「あら、確かに驚かそうと思つて声かけたのはわたしだけど、そこまで露骨に飛び退くほどだったかしら……？ だとしたら、ねえ、カノン、どっちだと思う？ わたしの気配が薄いのか、それともこの子の感覚が鈍いのか。わたし的には ふふ、どっちでも楽しそうね」

にやにやと、チエシヤ猫を思わせる笑みで、その少女は笑んだ。

「な……、あなた、誰」

びっくりした。本気でびっくりした。

いきなり真横、それも気配感じずに。それなりに気配探知に自信あつたけど、あの距離に一切気配なく詰め寄られたら、ここまで心臓って跳ねるんだ。

「ふふ、はじめまして、ね」

立てる？ とその人物があたしへと優雅に手を差し伸べた。

白猫。

初めて視界に収めたその人物の印象が、それ。

カノンの健康的な白さとは根底から異なる、死人のような不吉な白。いつそ青白いと表現した方がいいような、そこに生命の息吹を感じさせない亡者の肌の色。髪は当然のごとく骨のような白髪で、低身長は見上げる赤い目を不吉に見せるばかり。微笑んでいれば愛嬌に満ちているであろう顔立ちも、その病的さの中では不吉さを煽るばかりだった。

歩いている死人、もしくは毛を白に染め上げられた黒猫。

不吉そのものを体現したようなその小さな人物の差し伸べられた手をつかみ、あたしは立ち上がる。骨を思わせる細身で冷たいその指は、しかし体軀から想像できるか弱さとは無縁なほど力強く、思わず前によろめいた。

「つと……」

「……意外と軽いのね、あなた」

むっ、失礼な。服装変えたら幼女にしか見えないような人に言われる筋合いはない。

「カノンのお友達……かしら？　じゃあはじめましてね。それとも、どこかで会ってたりする？　もしそうだとしたらごめんなさいね。合縁奇縁悲喜交々、いちいち覚えていられるのはよほど幸せな人だけ。そんな人なんて、今のご時世にいるわけないでしょう？」

口の端を歪め笑んだまま、不可思議に骨のようなその人は言った。

「え、あたし初対面だ、けど」

「あら。じゃあはじめましてでよかったのね。カノンのお友達、っていうのも？」

「入学式から、って条件付きならそう」

「と、いうことはわたしの後輩ね。ふふふ……いきなりカノンのお友達と出会えるなんて、幸先はよさそうね」

ふわり、と猫のような身の軽さで、骨のような少女は身を翻し腰を折った。

長めに改造された制服のスカートの裾を摘み、言う。

「初めまして、新入生さん。わたしは夜陵孤実ヤリヨウコノミ。学内《集団》クラスター『アリギエーリ第五環』代表の二年生。カノンとは　まあ、家からみの長い付き合いね。以後、お見知りおきを」

態度とは裏腹の妙にフランクな語り口調でその人物、夜陵孤実は言った。

「えっと、夜陵　先輩？」

「孤実でいいわ。むしろ、そっちで呼んでくれないと困るわね」

「……どうしてです？」

「あら、名字を忌避するのに所属している家が嫌い以上の理由がどこにあるのかしら？」

「当然でしょう？」と言わんばかりに、孤実先輩が得意げな表情を浮かべた。ごもつともである。

「じゃあ…孤実先輩。さっきの話の流れから、カノンの知り合いってことはなんとなくわかるんですけど、その先輩がどうしてこんなとこまで来てるんです？」

さすがに上級生の予定まで完全に把握はしていないが、確か今日は全日程終了済みでクラブ勧誘やら何やらで仕事のない人間が残っていることも考えにくいはずだ。

「もちろん、カノンに挨拶だね。この子のうちは…ちょっとね、人に言い難いようなこと、いろいろあるから」

「……あ、孤実先輩……」

おずおずと、わきから見守るばかりだったカノンが声を上げる。それを嗜めるように、孤実先輩はゆるゆると首を振った。

「わかってるわ、ごめんなさいねカノン」

「いえ……」

申し訳なさそうに、カノンがこちらに目を向けた。もともと人のうちのことなんてそれほど知りたいとは思わない性質なのでそれほど気にしてはいないけど、こんな風な態度をとられるとなんとなく居心地が悪い。

「改めて入学おめでとう。よくあのカリギュラ並みに問題アリの兄を説得できたわね」

「ありがとうございます。でも、別に説得できたわけじゃないんですよ」

「あら？　ということは強硬策使ったの？　よく切り抜けられたわね」

「実を言うと、ちょっと危なかったんです。入学式前にちょっと連れ戻されそうになって、そこを曆さんに……」

なるほど。誰なのか微妙に気になっていたあの男、兄だったのね。道理で親しげで自分たちの世界展開してたわけだ。

「ふふふ……良縁ね。よかったじゃない、カノン。新学期早々お友達なんて、この学院じゃ望むべくもないことよ」

「うふふふ、と。楽しげに、心から楽しげに、孤実先輩は骸骨じゃがいものように笑った。

思わず恐怖を覚えてしまいそうになるほどの違和感、強制的に煽りたてられる不安感。どうして湧きあがるのか不明瞭な感覚に飲まれないように、あたしは思わず当たり前へと目をやる。

やや人の増えた教室、雰囲気は先程より退屈そう。時間経過に従って人は増えるが、一向に学生証配布の始まる様子はない。

どうしたことだろう。疑問符を頭に浮かべながら周囲を見回していると、

「どうかしたの？」

「あ、いえ別になんでも」

「………そういえば、さつきカノンが先輩に連絡をとってた。

「あります」

「あら、何？」

変な日本語になってしまった。動じないでいてくれた先輩がありがたい。

「あの、学生証の配布なんですけど、パンフレットじゃHR教室ってなってるのに全然始まってなくて……。先輩も去年入学したんですよね？ だったら、去年がどうだったのか、教えてくれませんか？」

あたしのその問いかけに、

「………ふっ、ふふふふふふっ」

「………なぜか孤実先輩は、笑い出した。

おかしくて仕方がない、といったような忍び笑い、いや、隠すつもりがないのをそういうのかはわからないけど、とにかく押し殺そうと頑張ってるかのような笑い。

神経を逆なでされるはずのその音に、あたしは逆に妙な安心感を覚えた。

「あの……何、か……?」

「ふふふふ　　っ……、ごめんなさいね、っ。でも、ここまで見事に騙されてるのを見るのって、むしろ滑稽ね」

「騙す……とは、どういうことなんでしょうか、孤実さん」

詰め寄るように、カノン。

「そのままの意味よ。はい、これ」

言いながら孤実先輩が制服の内ポケットから取り出したのは……二枚の、厚手のカードのようなものだった。

一見した厚み、約一センチ半。大きさ的にはちょっと大きめのキヤッシュカードぐらいで、色は電源の入っていない液晶パネルのよくな沈んだ黒。接続端子のようなものが端から伸びているのを見るに、何かの電子端末だろうか。

「あの、これ、は　?」

「HR教室で配布されてた電子生徒手帳よ。まだblankだから、適当な学内端末からホストサーバーに接続してダウンロードしなさい」

受け取ったそれは、存外軽い。大体拳銃の、半分ぐらいだろうか。この重量の中に宣言通りのスペックが詰め込まれているのだとしたら、なるほど大した技術だ。WIDAを個人単位で支給できるほどの財力がある国策学校らしい学生証である。

ってそうじゃなくて。

「……………これ、どこで　?」

「ふふ、恒例の新生生騙しよ。『HR』はHome RoomじゃなくてHost server Room、ただポツンと表記してるから、絶対わからないでしょう?　うちの学院こっぴど騙し結構やるから、気をつけなさいね」

「……………」

え、と。つまり、あたしたちは学院側の情報操作に見事に引っ掛

かっつた、つてこと？

「ちなみに入手までの手続きっていうのも半分嘘ね。確かに手続きはあるけど、重要なのは『誰が持っていった筐体に誰のデータが入ってるか』だから本来意味のないよ。二枚持ってきたのはなんとなくね。でも……無駄にならなくてよかつたじゃない」

ふふふふ、と再び猫のように孤実先輩は笑んだ。

でも考え見れば不自然だったように思う。在校生の銃器登録は校門前で一気にやってるのにそれよりもはるかに高価で重要なものはずの学生証がクラス単位での配布、それもHRがない条件下で、だ。恣意的にやっているにしては、学院の意図がちぐはぐすぎる。

「ありがとうございます……」

「あ、ありがとう」

今更ながら告げられた礼の言葉に、孤実先輩はただ目を細めただけだった。

「ふふふふ、貸し一つね」

どう返してもらおうかしら。

「……」

新学期早々、なんだか嫌な予感のする貸しを作ってしまった瞬間だった。

「さて……じゃあ本題に移りましょうか」

え、本題なんてあったの？

「カノン、放課後の時間、外せない用事で何か埋まってるかしら？」

「え、放課後……ですか？」

ええ、とあたしの内心を察した様子もなく孤実先輩はうなずく。

「ちょっとばかり面倒な案件が入っちゃって……そのお手伝いを頼みたいのよ。わたしとしてもこんな面倒事はご免こうむりたいのだけど……」『上』からの指示じゃね。まったく、面倒なものよ」

やれやれ、と首を振る孤実先輩。

対するカノンは、葛藤するかのように表情を歪めていた。理由は明白、あたしとの約束だ。これだけの時間しか話してないけどわか

る。カノンは、とにかく義理堅い。一度結んだ約束を無下にできるほどの人間じゃない。

ちらりちらりと視線を向けてくるカノンへ、あたしはほほ笑みを返した。

「いいよ、今日のは別に」

「でも……………」

「いいっていいって。今までお世話になった先輩なんですよ？」

「それは、そうですね」

「あたしの方はただの遊びだし、孤実先輩のは用事ですよ？」

「……………そう、ですね」

つぶやくように言い、カノンは先輩に向き直った。

「わかりました。放課後……………どちらに？」

「そうですね……………、生徒会室に、お願いできるかしら」

「と、言うことは零さんからでしょうか？」

「ええ。あの邪気眼男、新学期早々仕事に精出して……………イカれてるわね」

「ははは、は……………」

コメントし辛そうに、カノンは曖昧に笑った。

「じゃあ仕事、昼食後によろしくね。あと、《集団》の話。考えといてくれるわよね？」

「じゃあ、これからちょっと仕事だから。」

そういつて孤実先輩は軽快に身を翻し、教室のドアから廊下へと消えた。

入ったときと同様、気配を感じさせない、猫のような去り方。

古い表現だけど、なんだか化かされた、という言い方がしっくりくるような先輩だった。

「……………なんだか、変わった先輩だね」

正直な感想、それに対し、カノンはただ、曖昧に笑っただけだった。

5・疑い 落下

x x x x

まあ、ものの見事に包囲された。

「あー……」

これは、いまいちよろしくない。

黒岬からの交換転校生の紹介と、今町を賑やかしている連続殺人事件に関する種々連絡事項が執り行われたHRが開けての放課後、教室を睥睨して俺は内心で嘆息した。

雰囲気が違う、沸き立ち方が違う。

いつもなら三々五々、午前も半ばで授業終了となれば散っていくはずもクラスメイトが教室からなかなか出て行かない。そればかりか廊下にまで二年、一年、果ては三年から各種執行課に部活動がらみと見られる連中まで、廊下に詰め掛けている。戦場にも似たある種の緊張、抜け駆けを防止するための牽制や、きっかけを掴むための気配探查で作り上げられた拮抗は弥が上にも俺らの緊張感まで吊り上げる。

………まったく。

半ば萌木が来た時点で予想はできていたことだが、やはり人ごみは好きになれない。小学校時代は同じ孤児院で過ごしていたが、そのときもこんな感じだったとはいえ、立場が変わった今ではかなり人ごみが鬱陶しい。

ちなみにNAS養成科を正式な学科として保有できるのは中等教育後半、つまり高校過程からだが、その事前教育や一般的な護身として基礎的なNAS技術を教育する場合があるが、それらはすべて具体的な数値として成績化され、自分の実力を把握するのに役立つている。

そしてその成績を積み重ねここへ入学してきた、ということは一

一般人に比べはるかに自分の実力をよく把握しているということ、早い話、交換転校生に抜擢されるというのがどれほどの事態なのか、全員がよく理解している、ということでもある。

そして身内の鼻屑目若干込みで言うが、萌木は美人だ。再会して驚いた俺が言うんだから間違いない。アレは雑誌の表表紙で見かけたとしても、別に不思議には思わない。

まあ、そんなこんなで。

お近づきになりたいなーと思う男子と、それを牽制する睨み。

お友達になりたいなーと考える女子と、それを躊躇う雰囲気。

お仲間になりたいなーと画策する勧誘と、それを阻止する剣幕。

それに加え、交換転校生という話を聞きつけ、ただ見に来たもの。それらの雑踏に一向に帰ろうとしないクラスの連中、帰ろうと思っても人ごみのせいで教室から出られない人間を加えると

ほら、今の状況の出来上がりだ。

ちなみに俺は教室から出られない組。当たり前だ。百人近い規模にまで膨れ上がった、武器まで確実に持っている人ごみの中を何気なく歩けるほど、俺は肝が据わっていない。

で、その雑踏の元凶さんがどこにいるのかということ

「……………へえ」

支給されたWIDAを前に、なにやら思案顔だった。

まあ、無理もない。

全国数十校数あるNAS養成科もちの学校の中で、WIDAなんて高級品を一人一人に配布するなんて酔狂な真似を、ここ以外の学院がやるわけがない。

ちなみに萌木の席は、何の因果か俺の正面だったりする。

どうしてそんな席が開いているのかはなはだ疑問だが、まあ、そこに関する追求はやめておこう。好奇心は往々にして猫を殺す。殺された猫を見る趣味はない。

「驚いた。学校からの支給品なんて期待してなかったけど、なかなか上等なWIDAじゃない」

らしいな。粗悪品のWIDA見たことないから全然わかんないけど。

「ねえ、ナギ。これ、ほんとに使い潰してオツケーなの？」

「いいんじゃないの。俺も使うときに容赦したことないし」

というかそこまで上物なのかこのWIDA。俺としては学生NASに支給するにはちよつとお高い装備程度の認識しかなかったが……

「へえーへえー、ここまで上物平然と……。さすが総本山。なかなかやるじゃない……」

妙な対抗意識を燃やすな面倒くさい。そこまで黒岬に帰属意識があるならどうしてこつち来た。

「ま、使いつぶしていいならそうさせてもらっわ。なんだかんだで武器って結構重いし」

俺の机の上にウエストポーチのようなものを置き、ってどうして俺の机の上でやる。

「自分とこでやれ」

「いいじゃない別に。どうせすぐ終わるし」

ま、確かにそうだが。納得を待つまでもなく机の上のウエストポーチに腰から外した小振りな西洋剣、両脇から取り出した大型の自動拳銃と左右ともどもの予備弾倉、コーヒ缶程度のサイズの金属筒 たぶん閃光手榴弾と思われるものを四本、次々と収めていく。見た感じ全部オーダーメイドか改造品。拳銃は、へえ、やっぱマグナムか。好きだね、相変わらず。しかしよく持ち歩いてたね、このまま。WIDA使わずに。

WIDA、言ってみればそれは小型大容量武器ケースである。小型で大容量なんて情報処理部品じゃあるまいし……なんと思つことなかれ、そもそも物体の有無でさえ、言ってみれば二次元的三次元的四次元的に存在する『情報』に過ぎない。

詳しい原理は俺も知らない。が、WIDAは三次元的に物体を補充するのではなく、四次元的な座標 一般的には周波数と呼ばれる物体の持つチャンネルのようなものを確立乱数的に要領内部で散

らし、『そこにあるんだけどない』みたいな曖昧な状態にして、三次元的容積によらない大容量の補完を可能にしたんだとか。

欠点らしい欠点をあげると、周波数はそのまま時間経過とイコールなので劣化の早いもの、たとえば食い物なんかの補完には向かないこと。

あとは見かけによらず精密機械なので、NAS用のものはどうしてもちよつとは大型化することくらいだろうか。

まあそもそも名前がWIDA……Weapon Inside Dement ion of Anotherである。武装収納が前提なんで、結構ましな方ではあるらしい。

「これでよし……と」

全武装を収めきった物騒極まりない中身のWIDAをスカートの後方、腰のあたりに収める。

「……でも、いいのか？」

「何が？」

「こんな雑踏のど真ん中注目度満点のお前が全武器晒して、よ」

武装の情報は、言ってみればNASの生命線だ。学生といえどそのあたりは厳守するのが基本である。

「ああ、いいのよその辺は」

「そっか？」

「見られたところで対処できれば問題ないでしょ？」

「ごもつとも。そんなセリフ出るのも、お前の腕が化け物級だからだが。まったくもって、自信家なところほとんど変わってない見える。」

「というかナギも大して問題ないじゃない。昔手合わせして私がナギに勝った時ってあった？」

「あった」

「……いつよ？」

「いつだったか台風で停電した時。風と暗闇にビビったお前が混浴強請して、入浴中に電力復旧した直後」

「ああああああああれはノーカウント！ ノーカウントだから！」

「えー、でもお前が俺昏倒させたのってそんなときだけだろ？」

俺が風呂場で寝る羽目になったのもその時だけですが。まったくもっていいパンチだった。

「確かに攻撃したのは私だし、昏倒させたのも確かだけど、なかったことにしてって言ったじゃない！」

「そだっけ？」

「そうよ！ 昏倒させたことも含めて見たもの全部忘れなさいっていったでしょ！ そんなことまで覚えてないの？」

「ああ。あの時見た光景はあこの痛みと一緒にちらっと見えたならかな平野ごと忘れた」

「つつつ、昔の話よそれは！」

「どうだかね」

見たところ人並み程度に育ってはいるが、『一見してわかる程度』には至っていない様子。NASやってるってことはそれなりに筋肉質だろうから……はたしてどれほどの成長が見込まれたのやら。

真っ赤になって身を乗り出す萌木。激昂している様子。抜刀されてもおかしくない。

「まあ、落ちつけよ萌木。見られてるぞ」

「これが落ち着いて……って、見られてる？」

きよるきよる、とあたりに眼をやる萌木。

教室内は相変わらずの人込み。雑談とわずかな熱気と半日で終了するという興奮、交換転校生の存在と転校生が仲良く言葉を交わす人間の存在とが混乱を生みだし、清濁混ぜて混濁となる。その中でも俺たちに視線をやる人間はそれほど多くなく

「見らずにいられるかってこの野郎！」

その中でも一番目立つ茶髪の軽薄。

さっきから見てた主だった奴は、こいつと、その隣の野郎だけだ。板橋よ、そう熱くなるな。急いで事はし損ずる、先人の言葉に

もあるではないか」

「お前は気にならねえつてのかわ隆生寺！ さあ穂村洗いざらい話してもらおうか！ 現在話題の転校生と一体どんな関係なのか、具体的にはどこまで行ったのか！ さあ吐け！」

「……本人に聞け」

詰め寄る板橋を軽くあしらう。前から困惑の声が上がるが、まあ無視だ無視。

「お前な！ 今日転校してきたばかりの転校生、それも超絶な美少女たる時噤萌木嬢にいきなりお声をかけると？ そんな恐れ多いことを俺にやれと言ってるのか！」

「本人の前で言うな」

「大体、その、だな。そんなセクハラじみた発言が、女子に好まれる男ランキング第一位を志すこの俺にできると思うのか！ いや、できない。断言してやるう！」

いや、できるとかできないとか以前にそもそもその発言自体がセクハラじみてるぞ。

まったく。ため息と同時に助けを求めるように板橋の背後、小春の方へと目をやる。と、

「……さあ、どう出るシヨラザキ ミオ修羅崎澁図書委員所属よ……」

「……ううううう」

……何をやってる隆生寺手芸部員。何クラスメイトを泣かせてるんだ。しかもその泣かしてる相手は我がクラスの小動物こと修羅崎澁じゃないか。昔馴染みなんだから容赦しろよ。可愛いけどさ。

「……はあ」

面倒くさい。何ゆえこの状況に巻き込まれねばならんのだ。

「断言しなくてもいい。というか勘違いするな。萌木とはただの幼馴染」

「幼馴染だと？」

よるな、暑苦しい。あとお前の同胞の目線が痛い。ついでに廊下の雑踏の連中も。

「ああ、詳しくは本人か小春に聞いてくれ。あいつなら……間違はなく知ってるだろ」

「そりゃまあ事情通だし俺らに情報売ったのもあいつだし知ってたとしても不思議はないけどよ」

「と、いつか待ちなさい。このクラスって小春までいたの？」

「ふえっ？」

「素っ頓狂な声を上げる板橋を無視し、うなずく。」

「ああ、あそこにいるだろ。ついでに小春にいじられてるのは遷で、クラス委員長は都子、隣のクラスには孤実と七鳴がいるし、うちには名織、技術小屋まで行けば要がいるな」

「嘘。時計塔のメンツほとんどそろってるじゃない」

「そりゃ驚くだろう。俺も驚いた。いくらあそこの連中がNASになりやすいからって、何も同期の連中がほとんどここに集わなくてもいいだろうと、最初は思ったもんだ。」

「と、言うことは同期の中で黒岬に行ったのは私だけ、ってこと？」
「思案顔でなにやら回想していた萌木が思いついたように呟いた一言に、俺は首肯する。」

「そうなるな。なぜだかは……知らねーけど」

「まあ、名織みたいな例外中の例外除いて全員がNAS志望というのも驚きといえば驚きではある。」

「おいおい何なんだよ。俺以外みんなわかっちゃってるーって空気漂わせて……ってもしかしてこのメンツで事情把握してないの俺だけか？」

「ふうむ、今更だなわが友板橋よ。ナギの話聞いていなかったと見えるな」

「え？ ってことは……マジ？」

「全員が返した言葉は、無言。時に無言は下手な言葉よりも事実を語る、という。おお、なるほど。確かにこの場において無言ほど明確明瞭な回答は存在しないと言っている。」

「……マジで？」

「無言から読み取りたまえよ板橋。無論、大マジだ」

「……穂村、」

「さつきから言ってるだろ」

「修羅崎、」

「……うん」

「……転校生さん？」

「ここまで明確なのに気付かないって、逆に感心するわね……」

「……すみません」

助けを求めるように方々に向けていた視線を落とし、盛大なため息をつく板橋。哀れな男め、もう少し行間を読む能力を鍛えるがいい。

「ま、とにかくそういうわけだよ。俺と萌木はただの幼馴染。同じ孤児院で、同期ってだけだ」

「ついでに隆生寺も漣も都子も名織も孤実も七鳴も零も夜倉コホレもヤケラね」

単純な同郷の友、ただしその年季も縁故も半端じゃないだけ。何しろ全員がそれぞれの道を志す中学ごろまで、はつきり言って俺たちは家族同然だった。

血は水より濃い。先人の言葉である。

つまるところ縁故なんていうものは水よりも命にダイレクトコネクトされてるもので、水なんかに浸すとあつという間に溶けちまうような半端なもんだってことだ。まあ後ろ半分は冗談として置いておくにしても、縁故が大事っていうのは間違いじゃない。

「しかし三年ぶりの再開を語るにはいささか以上に混雑過ぎではないかね？ しかも我らの関係に聞き耳を立てられるのも……無粋ではないか？」

「お前にしちや妥当な提案だな」

確かに好奇の目の最中で自分の過去丸裸にするような露出趣味はない。現在を構成するのは過去、過去を知られればおのずと現在もわかるものだ。

それに……今朝の追跡者。

体格、所持武装、行動。第三者的に判断できる要素を統合すれば、あの人物が学院生である可能性は零ではなく、むしろ高いぐらいだ。脳天ずどん、ってのは、ごめんである。

「はっはっはっ、そう褒めるな」

「別に褒めてねえよ」

判断力があるってのは認めるが。まったく、これだからこいつとの付き合いはやめられない。

そういえば『あいつ』の銃……

俺の目が正しければ、あの銃は萌木の持つてる奴と同じ、AMのオートマグ、それもオートジャムの汚名を引つ被った？型だったはずだが何か関係　　そう、例えば入手先が同じとか、そういう関係、あたりするんだろうか。

AMオートマグ？、名前からも創造できるようにデザートイーグルなどと同じ、オートマチックのマグナムハンドガンであるが、大きく違うのはその性能。薬室の閉鎖機構をなんとライフル並みの複雑にしたせいで装填不良の発生率が以上に高まり、付いたあだ名が『オートジャム』。もはやネタの領域である。

はつきり言って、実用には向かない銃。

そんな銃をわざわざ使い続けるには、それ相応の理由が必要だ。

NAS、ひいては護身に所持する一般人にとって、銃は命を預ける存在である。いざというときに装填不良を乱発するような銃を好んで持つ人間は早々いない。少なくとも実用に用いている人間が複数人存在した時点で、そこに何かしらの関係を疑える程度には、少人数である。

「はっはっはっ、そう照れるな」

小春から目配せ会話。一瞬だけ眼の色がちらつく。『念頭には入れておけ、ただし過度な疑いは禁物』。わかっているよ。

考え込むように腕を組んだ小春から眼をそらし、疑いを頭から振り払う。

「確か……時際は昔から禁酒法時代でも嗜めるアルコール類を好ん

でいたな」

つまるところノンアルコール飲料の類ですが。ちなみにソフトドリンクじゃない。ここ、重要ね。

「あら、覚えてたのね」

「ふふふ、この俺を誰だと心得る。情報と名のつくもので俺が忘れたことなどありはしない」

「相変わらずね……ほんと」

「はっはっはっ」

呆れたような萌木、鼻高々な小春。

ちなみにこのやり取りも、孤児院時代から延々リピートである。

ホント、どれだけ変わってないんだか。

「ところでナギよ、このあたりでノンアルコールといえば、やはり『ヒラサカ』当たりかね？」

言われて若干思考、現在の懐具合、込み具合、メニューラインナップ、安全性その他。それに紛れて目配せ再び。『探りを入れてみるべきか?』。小さく頷いた。

懐具合、問題なし。春休み中の仕事の甲斐あり、多少の奢りでもびくともしない程度はある。込み具合、マイナーな店故それほど問題なし。メニュー、実に萌木好きなラインナップ。安全性、メニュー次第。メンバーは………

「大丈夫、だな」

俺と小春と萌木、最低でもこの三人がいれば問題なし。安全面でも彩りのにも、これならバランスがいい。

「決まりだな」

猫のような含み笑い、その裏にどことなく楽しそうな感情をたたえ、小春は満足そうに身をひるがえした。

「ではさっそく向かうとしよう。途中で少しばかり寄り道すれば、歓談するにもいい時間だ」

「だな。昼飯にすつか。どこ行く？」

「『ネノクニ屋』あたりが適当だろう。我らが再会の祝宴にしては、

申し分ないはずだ」

「『ネノク二屋』？ ちょっと高すぎないか？」

「何、普段の質素な感性で計らなければさしたる額ではない」

「確かにそうだけだよ、でも……なんだかな」

こう……つい普段の食費に換算して何日分になるとか、これを他所に回せば何になるか、とか、そういう所帯じみた計算が出てしまうのだ。羽目を外す際には邪魔以外の何者でもないが、染み付いてしまったものはしょうがない。

「貧乏性め」

「何とでも言え。行くぞ」

「あの、申し訳ないんですけど、俺も一緒にしてもよろしいですか？」

どうした板橋おどおどして。普段のあっけらかんとした態度はどうした。

「無論だとも。わが友を見捨てるほど、俺は薄情ではないつもりだ」

「マジか！」

「萌木が良ければ、だけどな」

確かに俺も友人見捨てるほど腐っちゃいないが、主賓の意向を平然と無視するほど厚顔無恥でもない。ちらりと横目で萌木の表情をうかがう。と、

「友の友は友……ってね。こっちの話とか聞きたいと思ってたし、一緒にしてくれるかしら？」

「喜んで！」

犬か貴様は。

ったく。

内心でため息、しかし口には出さず、小春の後に続いた。

選択肢の失敗、その二。

後でわかっても、後悔は先に立たないものなのだ。

x x x x

学生への諸注意事項本年度第一
現在碓市内に置いて活動中の二件の通り魔事件、通称『フェイスク
ラッシャー』と『肝吸い』事件についての連絡事項に関して

・フェイスクラッシャー

犠牲者数二十二名、学生、およびその近親者を対象とし、週に一名程度のペースで活動を行う殺人者。犠牲者は共通点として全員頭部が鈍器のようなもので強烈に陥没、もしくは頭皮が地面に張り付くほどの力で叩き付けられており、その無残に顔面が破壊された様
から、当社では該当通り魔を『フェイスクラッシャー』と呼称、注意を呼び掛けるものとする。

被害者の所有する銃器の類に一切の発砲がなく、保有している武器が展開された様子すらなかったことから、抗戦することなく一方的に殺害されたものと判断、対象との抗戦の際には奇襲に注意すること。なお遺体の状況から判断し、打撃武器を武器として使用している可能性が示唆されているため、防弾レベルは低いものが対処することを推奨する。

登場地域・碓市全域

・肝吸い

犠牲者数四十三名。男女年齢問わず殺害を行う残虐非道な殺人者。ペースはまちまちであり、被害者は殺害一週間ほど前から行方不明となることが特徴である。

特徴的なのはその殺害方法で、被害者は眼球、各種臓器と体液のほとんどを抜き取られ、空っぽの肉塊となって発見されるのが特徴である。切り口は鋭利であり、また行方不明となるという特徴から組織的な殺害行為である可能性が示唆される。

組織的殺害行為、凄惨な殺害方法から碓市県内において最も懸念

される殺人者であり、全学生に対し注意、および早期対処を勧告する。

登場地域・碓市外周スラム、倉庫街

x x x x

駅前ロータリーで、NAS養成科の姿は埋没できない。

国立碓学院、特徴的なのはその制服で、学科ごとに違う色を用いているためにどの学科なのかは町に居を構えるものであれば一目瞭然であり、その色、重厚さ、纏うものの雰囲気、日常の中への埋没を許さないためだ。

人を殺す覚悟を固めた者、いつ殺されてもおかしくない者。単純ながらにして深刻、『死が近い』という要素はそれだけで世間との隔絶を巨大にし、一般というくりの中から自然とその存在を浮き彫りにする。

浮き彫りになった人間が同じ服装ともなればなおさら。この物騒なご時世、防弾効果の高い制服を悪戯に脱ぐのは得策ではなく、自然と養成科は制服のまま出かけることが多くなる。

結果、今日のような日、祝い事でありながら一日が半分で終わってしまうような日においては、

「……………浮いてるなあ……………」

ロータリー前の植え込みに座り込んで町を眺めながら、感慨にふけるほど、もの見事にNAS養成科生が目立っていた。

その様まるで疎水性分子。同じもの同士でまとまってエネルギー的な無駄を防ごうとしているあたりもそっくり。何の話だ、と心中で突っ込みを入れる。

ちらほらと見える碓学院の制服、寄り集まって歓談、もしくは遊興にいそしむ、NAS養成科の黒。夜間迷彩の役割を果たすその色は、人の密度がかなり高い今ここでもよく目立つ。あの一人一人が懐に拳銃をしのばせ、WIDAにはもつと強力な火器を忍ばせてい

るのだ。下手を打てばこの場でズドン。擁護派の皆様にとっては、動きづらいことこの上ない一日になりそうだ。

まあ、だからこそあたしみたいなのにとっては動きやすい一日になるんだけど。

思いながら手元の電子生徒手帳をタッチ、画面隅の時計を表示させる。

学生NAS向けの諸注意事項が表示された画面に映し出された時間、それによると織瑚との待ち合わせまであと数分、天候悪化の心配はなく、風速は弱め、狙撃行動への影響『微』、視界は良好ながらも太陽光に気をつけること。

「……………」

周到すぎる情報の羅列に辟易しながらウィンドウを閉じた。操作中に何度も思ったが、この端末いろいろ詰め込みすぎてる。

電子生徒手帳の電源を落とし、まったりとロータリーを見回した。それなりの人ごみ。制服が無改造である辺りから考えて一年生。上級生もちらほらと。両手をふさぐこともせず体幹にブレを生むこともしない。年季の違い、覚悟の違いという奴だ。

人ごみがあれば千差万別の世界を生む、世界が違えば価値観が違う、行動が違う、思想が違う。根底にある罪悪感という物差しも理性というブレーキも、今を生きるすべてが違う。

誰が思うだろう。こうして日々を穏やかにすごす人々の中に、人殺しという異分子がすでに紛れていることを。

人殺しなんて突発的に起こるもの。予想はできても予測はできず、誰がそれへと変わるか推測すらできない。道端に落ちている石に躓くような、たまたま落ちている硬貨を拾うような、拾った硬貨から喧嘩に発展するような、そんな日常で起こる何気ないことのように漫然と見えても確定して見ることはできない。

この場にいる人間が突発的に人を殺すことを予想はできても、予測できない。だからこそ学生NASはいつ何時発生するかわからない人殺しのために、神経を尖らせる。

のんびりとして見えるこの風景も、一皮向けば立派な戦地だ。いつ何時たりとも、NASにとって戦地足り得ない場所はない。人が存在すればそこはどこであるうともNASにとっては戦場足りうる場所、血で血を洗い肉で肉を拭い骨で骨を拭うような、凄惨な惨劇の種だ。

ずくん。

左肩の骨が軋む。

内側から毀れるような生きるとは真逆の痛覚。骨を直接握り締められるような不快な痛覚。過去からの重みは自覚となって脳裏に浮かぶ情景を排除し、現実へと思考を回帰させる。

「っあー……」

沈みかけていた不愉快な思考から現実へ意識を引つ張り上げる。時刻確認、残り二分。そろそろ着てもおかしくないころ。織瑚の性格ならちよつと遅めの時間帯だ。

そういえば織瑚にも気をつけるように言っとかないと。できる限りくつついて移動するようにはするけど、四六時中一緒ってわけには行かない。自衛は自分でしつかりと、これ、現代社会の基本ね。銃は持つてるらしいけど授業以上の練習はしてないから下手なはずだし　と噂をすれば、だ。

ポケットの中で震動。携帯電話を取り出し投光パネル展開。

表示確認『着信　オリコ』。

通話アイコンクリック、上下に展開されたマイクを昔ながらに耳元へ。

「もしもし織瑚？　どうかした？」

『才友達八来レナクナッタソウダ』

………はい？

なに………これ？

何が起こってる？　現実が、脳内に追いつかない。いや脳内が現

実に追いつかない。耳元の電話から聞こえるざらついた機械音声、おそらくは変声機。肉声を残しながらも機械的に個人の判別を不可能とした、仮面を被った人間の声。

『柵内暦…… 碓学院NAS養成科一年。新入りカ。フン、入学ノ空
気ニ酔イ、学外デ待ち合ワセルナドトイウ愚行ニ走ルトハ、コレダ
カラ新人八狙イヤスイ……。コノ少女モ、トテモ簡単ダツタ』

「あなた……誰。織瑚に何したの！」

『何モシテイナイ。ソナナ回答ガ在リ得ルトデモ？ フン、予想以
上ニ愚カダナ』

くっ……。

内心で歯噛みしながら言い聞かせる。落ち着け、冷静さを失うな
零細に考える。細かく細かく、相手の意図を探れ。

電話口に聞こえぬよう、ちいさく深く深呼吸。脳に回った酸素が
あたしの温度を下げる。冷静に、ゆっくりと近づける。

「……だけど、殺したわけじゃない」

……そうじゃない可能性、殺されている可能性が、一瞬脳裏を
よぎる。

「……そうでしょうか？」

確認するような、祈るような問いかけに、

『ホウ、ソノ程度ニハ利口ト言ウワケカ』

電話口の仮面の声は、楽しげに笑った。

第一問、正解。殺したのならあたしに連絡を取る意図がない。目
的はおそらくあたし、織瑚は、そのついでだ。

『ソウ。モウ予想ハツイテイルダロウ？ 目的ハ才前ダ。逆ニ言エ
バ、才前サエココニクレバコノ少女ニハ用ハナイ』

「あたしが目的？ どうして？」

『身代金ト言エバ納得カ？ 口封ジト言エバ理解デキルノカ？ 違
ウ、違ウダロウ柵内暦。才前ハモウ理解シテイルハズダ。殺人行為
ニサシタル理由ハイライナイ。コレハ、タダノ確立ノ問題ダ』

「くっ……」

つまるところ、これは偶然。たまたま不幸があたしと織瑚の上に落ちてきたという、ただそれだけの理由。殺人行為に大きな理由は要らない、確かにそのとおり。だけどこれは、これは行く欄でも納得がいかなさ過ぎる。

どうして、あたしが。

どうして、織瑚が。

当に決めたはずの覚悟が瓦解し、脆弱な地盤が顔を覗かせる。

死ぬかもしれない、殺すかもしれない可能性。逃げ出したくなる臆病な心。すべてを圧殺しながら、さらにあたしは言葉を連ねる。

「……条件は？」

『商業区会堂通り、「エテュディアン」ト言ウ喫茶店ガアル』

「そこまで来い、ってこと？」

『ソノ通りダ。十五分以内ニ来イ。サモナクバコノ少女ノ命ハ保障シナイ』

「身代金その他は？」

『不要ダ。ソモソモ孤児デアル貴様カラ身代金ナド取レルハズガナカロウ』

もっともだ。おじさんはあたしにいろいろよくしてくれるけど、あたし自身は学生で、目的はそもそもあたし自身だ。どうしてあたしを狙うのかは知らないけど、可能性として愉快犯が真っ先に上げられる以上、金銭を目的にしていることは考えにくい。

『ソノ身一ツ、ソノ命一ツデコイ。連絡八行ウナ。理解シテイルダロウガ、私ノ眼ハ貴様ノスグソバニアル。』

連絡八以上ダ。急グガイイ』

プツツ。

一方的に叩ききられた電話。リダイヤルする。が、あの仮面の声の主はもう電話をつなげるつもりがないらしい。理解の追いつかない頭、おかげでうまく考えがまとまらない。条件反射的に唇をわずかに噛み切り、その場から立ち上がって走り出した。

x x x x

無料の市営バスに乗り込み五分、そこから走り抜けて、約十分。満ち行く先に人はなく、バスすら待つことなくさりと乗り込めしかも中はガラガラだった。タイミングのよさに辟易、誰か頼れる人に連絡しようかとも思ったが、監視があると言われた以上うかつな行動を取るわけにも行かず、そもそもNAS関連の知り合いとさえば孤実先輩とカノンしかおらずしかも連絡先を知らないことに思い至り歯噛みする。法定速度を遵守する市営バスがもどかしい、弾む呼吸がはねる心臓が脈動する血管が酸素を求める脳がもどかしい。体が重い、重さが邪魔だ。どうして邪魔をする、どうして、どうして、どうして！

到着した商業区画、会堂通りは碓氷商業区画のはずれ、夕方から夜間にかけてにぎわう店舗が軒を連ねる裏通りだ。

煙にけぶったような荒廃感、終末めいた翳りを孕んだ空気。日中であろうとも闇が多いこの通りは、いわば商業区という碓氷の表の裏に一番近い場所。

通りの中ほどに、目指す喫茶店、『エテュディアン』はあった。周りとの調和を裏切らないくすんだ外壁、眩んだ白色。寂れた通りの中にあつてなお賑わいを予感させるようないわば『休息』の雰囲気を持つ、この通りでは比較的まともな店。

誰もいない通りの中、暗い店内が闇を湛えて虎口を広げて獲物を待つ。

耳を圧迫する静寂は、さながら無数の気配だ。

人影はなく、気配すら存在しない。ただ唯一店の前にぶら下がった『OPEN』の札だけが他者の存在を物語る。

指定されたのは、この店。

織物があるとしたら、店内だろう。

肉食獣の顎、深淵の淵、地獄の門。連想されるそれらを振り切るように、店のマットを踏む。

「……………」

ポケットに震動。携帯電話だ。取り出して展開、表示、『着信オリコ』。

「もしもし」

『店ノ前ニ立テ』

「……………どうして？」

『ソノ位置デハ貴様ガ見エナイカラダ』

見えない、つまり上から。奴は上からあたしを見ている。

『オット、見上ゲテモ無駄ダ。貴様カラハ見エナイ』

余裕の声音。つまりは確信。可能性、ライフルなどによるスコップ狙撃。

「殺すつもりなの？」

『心外ダナ。タダ確認スルダケダ。貴様ガ本当ニ一人ナノカ』

「……………」

『従ワナケレバ少女ヲ殺ス』

「……………」

無言のまま、店の前の屋根の下から通りへと一步を踏み出す。

どこから見ているのかわからない、ただ『見られている』と言う実感だけが残る数秒。緊張と警戒、寿命を縮める数秒間。

いきなり、あたしの体が宙へと上昇した。

……………え？

何……………？ これ。

強引に背中あたりから天空へ放り出される感覚。圧迫を逆流させられたかのような不穏な違和感。ありえるはずのない節理への逆行、紐なし床なし、逆バンジー。

店が箱に、通りが棒になる。

空気の温度が、肌でわかるほど冷たくなる。

落下ではないその身一つの上昇。見上げるばかりの蒼穹の一部となる実感なき体感なき錯覚のような感覚。峻険な断崖は眼を見張る絶景、眺めるだけなら美しい。蒼穹もまた同じで、遠くにあるから綺麗なんだ。

混ざれば終わる、近づけば死ぬ。それは快樂ながらにして破滅。それは麻薬。命を侵し魂を犯す、破滅と自滅の自慰行為。

見上げれば、おそらくあたしは点だ。くしくも場所は天。何の洒落だ。面白くない。

唐突に、上昇は終わりを告げる。

物理学者でなくても理解できる命題にもならない命題。高みにあるものは落ちる。盛者必衰の理。理の中に生きるものである以上柵内層という個人は必然を持って理に絡め取られ、結果内臓が取り残されるような奇怪な浮遊感を持って、あたしの体は重力に誘われ地表へと特攻する。

肌を叩く風は気体でなく液体のようで、
はためく服は、ぬれたような重さを宙へと残留し、
反転した姿勢の中を、肉の重みに従って落ちていく。

堕ちて行く、墜ちていく。

困惑以前の、無理解。回答は目の前に見えている、導出過程にも間違いはない、ただ『これで正解なのが理解できない』違和感。

あたしは、落ちていく。

抗う手段はない。

この二つから導出された答えは、一つ。

このままじゃ、死ぬ。

絶対に死ぬ、確実に死ぬ。

頭を潰されて、死ぬ。

唐突に理解する。仮面の声が何者か。つい先程眼を通した注意事項その一。あいつが、あいつこそがこの町を賑やかす連続通り魔、『フェイスクラッシャー』。

このありえない事象を起こした原因が何か、そんなことに興味は

ない。これからあたしは死ぬ。死ぬことが確定した人間はもはや死人と同義だ。

だから、一言。

地表にぶつかるその前に、奇跡的に手放さなかった携帯に、問う。「あなた、名前は？」

無意味な問い、散るだけの答えしか持ちえぬもの。それに対して、仮面の声は、

『「ウタタネ」』

一言だけ、名乗り、

『サラバダ』

告げ、

もはや眼前に迫った地面の前に、その先の思考は圧殺され、そしてあたしの頭の左半分が、質量と言う兵器の餌食となった。

あたしは、死んだ。

6・ノーアルコールバーで

x x x x

「どこ行ってたんだよ、板橋」

「悪いな、へへ。ちよつとばっか家に連絡だよ。うちってアレだろ？ なんつーか、お堅いじゃん？」

「そうだったな」

そんなやり取りと共にちよつと遅れてきた板橋、部活への顔出しがあるとかでいったん挨拶に行った小春と合流し、ちよつとばっかりお高い海鮮丼屋で昼食、適当にふらふらと市街地を案内するついでに紹介して回ると、やっぱり時間はかかる。

と、言うのも、

「あれ？ ねえ、あそこに見えてる刑務所みたいなもの、何？」

「ほう、アレに気付くとはさすが特待生……ご教授しよう！ あの壁こそ砦市ひいては近隣都市の電力、その半数以上を担う反物質発電所だ！」

「は、発電所？」

「どうしてお前が驚くんだよ、板橋」

「反物質……随分物騒なの使ってるのね」

「ああ。この俺のネットワークを駆使したところで製法がわからん代物だ。どうかね、興味があるなら近場までいってみるのも悪くないとは思うが？」

「あ、お願いできる？」

とか、

「そっぴや萌木、お前って制服改造とか武器のメンテだとか、どこ

に頼んでる？」

「え、普通に技術部だけ……」

「おやあ、それはいただけないなあ時噤よ」

「そーそー。天下のNAS養成科総本山！ しかもその特待生ともあるとお方が、下々と同じレベルの技術なんてもつたいない！ っ
て言うか、普通に物足りなくね？ 話題的にもよあ」

「そついわれても……って、そつえば要、いるのよね？」

「ああ、普通に学内にいるぞ」

「嘘、だったらどうして出る前に言ってくれなかったのよ。早いほうがいいんだから、さっさと注文しないと……」

「ならば今から赴けばよかるう」

とか、

「さすが総本山のお膝もと……。刀剣店だけでこんなに？」

「ああ、この辺はそういう武装関係の店ばっかだからな。山のほうまで言ったら刀匠もいるぞ？」

「はー……すごいとは思ってたけど、まさかそこまでいるとはね。侮ってたわ、ちよつとだけ」

「ふっふっふっ。そう言えばナギはこの近隣の常連であつたな」

「ああ。ナイフ専だし」

「店の一つぐらい紹介してやったらどうかね？ 聞くとところ見るところに夜と、時噤の戦闘スタイルは今も昔とそれほど変わっておらぬのだらう？」

「ええ、あんまり変わってないわ。ナギ、いい砥師いるなら教えてくれる？ そろそろ完全に手、入れときたいし」

「いいけど……遠いぞ？」

「はは、我らはかまわぬ。のう 板橋？」

「お、おう！ むしろ、俺達もエッジ、新調したいしな」
とか。

「え、これ弾丸専門店？」

「ああ、何考えて作つたかわからん便利店第一位だな」

「ああ、ほんとに何でこんな店儲かるのかわかんねえよな。銃弾なんて購買部でも売ってんのに」

「それはお前らの発砲数が少ないからであろう。ああ、念のために紹介しておくのだ、この店は古今東西、生産ロットの少ない銃の専用弾から一般的に考えて必要とされない高級弾、古すぎてどこでも取り扱っていないような骨董品、それらに加え自作用の弾頭・火薬・雷管・空薬莖、それらすべてを取り扱った便利店だ。現に俺の500S & amp; Wスペシャル弾はこの店のもので、生徒会の連中もなにやらいろいろと世話になっていろいろらしい。狙撃用の弾丸の精度も折り紙つき、ミスファイアもほぼ皆無の良店舗だ」

「と、言うことは一般的じゃない大口径とかもあるのね？」

「何かお探しかね……？」

「ええ。 。 仕事前に今朝三発ほど発砲しちゃって、補給のあてがなかったのよ。小春、マガジンとかも手に入る？」

「もちろんだとも。して、何のマガジンをお求めかね？」

「AMのオートマグ、？と？両方」

「珍しい銃だな……しかし、おそらくはあるだろう。入って確認すればそれで済む」
とか。

本来なら行くべきはずの歓談の場に至るまでに方々へ寄り道、散策、買い物なんかの言うなれば目的以外の用事が増えて、鈍足牛歩を繰り返し、その寄り道がやけに長くなるのでとにかく前に進まなかつたのだ。

集団になったときから大体予想してはいたけど、こうもいろいろ案内する羽目になるとは少々予想外。だけど半分以上武器関連だったのでちよつと安心。これでブティックだとかアクセサリーショップだとかに連行されたら、眼も当てられない事態になる。

そんなこんなで市街地をさまようこと、約四時間。

「……っ、かれたー……」

ぐつたりと枯れたような体を本来の歓談予定地、「ノンアルコー

ルバー『ヒラサカ』」の常連用カウンター席に押し込んだ。

完全脱力、気力流出、余力あるけど、動きたくない。無論体力的にはまだまだ強襲かけても大丈夫な程度には余裕があるけど、それとこれとは別の話である。

「はっはっはっ、だらしのないナギよ。あの程度の市外行脚でもうダウンかね？」

「うるさい。体力と気力は別物だろ」

「でもよ、穂村。久しぶりに会った幼馴染だろ？　へたれてるのつてまづくね？」

「いいのよ別に。もとからいるつて知って入ってきたんだし、顔なじみ程度の認識で」

「そういうもんか？」

「そういうもんだ、板橋」

とりあえずカウンター席に全員並んで妙に若々しい髭のマスターに適当に注文、そのままつたりと座席に背中を預ける。

ノンアルコールバー、その名の示す通り『ヒラサカ』には一切のアルコール類が存在しない。しかしそれでもバーを名乗る以上、雰囲気だけは一流なわけで、ムーディなライトに照らしあげられた店内は健康的な空気ながらもひどく落ち着いた雰囲気も保有している。味が一級品なこと、若く見えるが人生経験豊富なマスターの人柄が妙にいいことなども人気の由縁だ。

とりあえず再会を祝して、ということとで適当に注文したジンジャーエールで乾杯。喉を焼くほどの強烈な刺激、鮮烈な香りが鼻腔を駆け抜ける。

「ぐっ……ほっ！　穂村！　なんだよこのジンジャー！」

「あら、質のいいジンジャーエールね。いい辛みじゃない」

「ふっふっふっ、油断したな板橋よ。市販のドライでは味わえぬ、濃厚な香りだろう？」

「濃厚すぎる！　喉が焼けたぞ！」

さすが『ヒラサカ』初心者。ここのジンジャー、市販品とは格が

違う。言わずにのませる、これがここの洗礼だ。

ちなみに席順は左から、板橋、小春、萌木、俺である。

「実践なら死んでるぞ、板橋。『学生NASたるもの飲食物ひとつにも警戒を怠らぬべし』ってな」

「NAS憲章第四項、ね」

言うが早い、手元のグラスを一気に傾ける萌木。喉を焼くほど強烈な生姜の風味と獰猛なまでによく効いた炭酸をものともせず、一気にグラスの四分の三ほどをあおり、

「……………はー、やっと落ち着けたわ」

「お前、今まであれで落ち着いてなかったってのか？」

「当然でしょ？ あちこちうつろつき回ってたし、うつろっていると警戒も必要じゃない。たださえ物騒な世の中なのに、今この町ってずいぶんホットだし……………油断もならないじゃない」

無然とした様子、さも当然といった語感だった。

確かに学生であるうちからNASを名乗っている以上、多少なりとも警戒は必要だけど、それを含めて浮ついてない状態のことを世間では落ち着いた状態というのだが、これは俺の間違いなのだろうか。

一口、手元のジンジャーをあおる。

「随分NASらしくなったな、お前」

「何よ、いきなり」

「いや、なんとなくな」

なにしろ天下の交換転校生だ。小春が嬉々として話したところによると待遇はNAS特待と同等、つまりところ学費全額免除奨学金待遇である。当然その待遇に上り詰めるまでには相応の努力と、相応の苦勞を積み重ねてきたわけで

「……………」

「わっ！」

なんとなく左手が萌木の頭に伸びた。絹糸のような感触、そのまま梳くように手を動かすと、萌木は慌てた仕草で俺の手を払いのけ

る。

「何すんのよ、いきなり！」

「いや、なんとなく？」

ほんとにどうしてこんなことしようと思ったのか、俺にもよくわからない。ただ手が動いたのは本当になんとなくで、思い当たる節があるとするればそれは俺が昔のこいつを知っているという事実にはなく、孤児院にいた際に見せた色々に起因すると予想は着くがその中に思い至る記憶なんて

「……………」

いっばいあった。

「ったく…………もう小学生じゃないんだからいきなりそついうの、やめてほしいわね、ホント」

「はは、悪い悪い」

「とは思ってなさそうね」

俺の言葉を途中で遮り、睨みを効かせながらわずかに乱れた藍色の髪を、萌木は適当に直していく。表情はわずかに赤みを帯びているあたり、触れられることに慣れていないのだろう。脇で見てる二人が雑談に夢中だったのが幸いである。

「…………それで？ そつちは孤児院でてからどうしてんの？」

「見ての通り。姉さんの籍にぶち込まれた後に碇入って、普通に学生NASやってるよ。特記事項も皆無、平々凡々な成績でな」

「平々凡々？ あんたが？ なによそれ。何かの冗談？」

言葉通り冗談めかした表情で悠然と頬杖を突く萌木。口元には笑み、どうやら、本気で冗談か何かだと思ってるらしいな、こいつは「冗談のつもりはないんだけどな」

「嘘」

「嘘じゃない。だろ、小春」

「うん？」

気を効かせていたのか、あるいは板橋との歓談に夢中だったのか、こいつにしては珍しく、きょとんとした表情で振り返る。

ちらりと目線が萌木、俺の順に移り、ああ、と一秒後に小春がうなずく。

「嘘ではない。ナギは板橋と並ぶほどの低成績保持者、一般教科の成績はさておき、実技、それも拳銃射撃においては学内最低をさまざまほどのド・下手だ」

「うそ……。でも小春、ナギって私たちの仲間内じゃ」

「しかし数値は嘘をつかぬ。嘘だと思うのなら例の権限で確認してみるといい。上から探るのが手間に思えるぞ」

「……………手抜き、じゃなく？」

「そんなことをする意味に何か心当たりでも？」

「……………っ、いえ、ないわね」

小春からの聞き返しに歯噛みしながらも萌木は肯定を返した。

顔を曇らせ、わずかに俯く。長いとも言いがたい中途半端な髪の間からグラスを見つめる目、その表情は、憂い。何か気に入らない、でも覆せない事実に向き合った時、萌木は決まってこんな表情を作る。わずかな隙間から、吐き出すように萌木が呟いた。

「……………ナギ、どうしたのよ」

「どうしたって？」

あえて選択したいいつもと変わらぬ物言いに、萌木の目に小さな怒気が宿った。

「NASになる、そう決めたのはあなたでしょう？」

「ああ、そうだな」

小学時代、恩人である女性から聞かされてNASを志した瞬間、俺は将来をその道に賭すことを決めた。

「じゃあ、どうして手、抜いてるの？」

「そんなことする理由に心当たりでもあるか？」

「ないわ」

間髪の入らない答え。それだけ確信してる、ってことか。

「でも納得できないのよ。あなたも教室で言ってたじゃない。孤児院時代私に負けたことない、って。その私が今ここまでやってこれ

てて、あんたが低成績？ 何の冗談よ……これ」
「冗談じゃなくて現実だ。それに……もう三年ほど前だぞ？」
「でもおかしいじゃない。今の御時世、実力一つでどこまでも登れるのよ？ このシステムじゃ入学時点で《委員会》に目、つけられてもおかしくないほどの実力で、しかも《リバーズ》持ちで、なのにこの立場なんてどう考えてもおかしいじゃないの……」

じりっ

カウンター席に、焦げたような匂いが漂った。

「落ちつけよ、萌木」

感情をつぶやくような声音に交えて吐きだし続ける萌木の目の前に、マスターが滑らせてきたアップルソーダを滑らせる。気がきくマスターに視線で小さく礼を告げると、マスターは小さく微笑み、それ以上何も言わなかった。

「……………ごめんなさい。ちょっと取り乱したわ」

呟くようにいいながら、萌木が目の前の琥珀色へと手を伸ばす。何かが焼け焦げるような音と燃焼の異臭が焼失し、目から怒りの色が薄くなった。

完全に氷が解けた萌木のジンジャーのグラスを、カウンターの端へと寄せる。

「基本俺って面剛嫌いだからな。それに、銃はドが着く下手なのは昔っからだろ」

「ふむ………そういえばそうであったな」

納得の表情でうなづく小春。今までの話は全部筒抜け、というわけか。相変わらず、油断ならない。

「って小春、今までそっちの話も聞こえてたってことか？」

「何を言う板橋。隣で俺にも関わりのある話をされていて耳に入らぬわけではないだろう？ それに、何やら面白いワードが耳にダイビングを所望されたようなのでなあ……………」

にやり。かの哲学者の言葉を幻視するほどの深淵いかにしやうを含んだ笑みを浮かべる。なんだ、何がそんなに楽しげな言葉なんだ。脳内で疑問を並べ立てる俺の様子を察した様子もなく、ひどく楽しげに。

「何よそれ。《委員会》とか《リバーズ》とかがそんなに楽しいの？」

「ああ、楽しいとも。あるともないともつかぬ存在ほど楽しいものはないと言っている」

冷笑混じりの萌木と違い、小春は随分と、楽しげだった。

しかし、《委員会》……ね。

裕学院に限らず、すべての国立NAS養成科には『委員会』と公式に呼ばれている機関が存在しない。無論、いくらNAS養成科が存在するとは言えどそこも『学校』である以上、学生自治機関である『委員会』に近いものは存在しているのだが、それらはすべて公式には『部署』であり『委員会』ではない、というのが学校側の弁である。

いくら生徒間でそう名乗ろうとも、公式では消して委員会とは認めない、その頑なかつ事務的な姿勢が生じさせた一つの都市伝説的な存在が《委員会》と呼ばれる、一つの裏機関だ。

曰く、『学生NASに与えられた強権を不当に行使した人間を抹殺する仕事人』。

曰く、『該当地区最強の学生NAS《集団》』。

『殺人』という世を混乱させる元凶である権利を持って治安を維持するという矛盾、その矛盾を矛盾たらしめぬよう殺人公社から遣わされた、『噂のみで語られる存在するかわからない委員会』。

彼らは総勢で二十名ほどがあり、学生の中に紛れ世間ではなく、NAS自身の治安を維持することを生業とする。それ故にメンバーは学生の中でも図抜けた実力者が選ばれ、選ばれた者には教員に匹敵するほどの権限と、将来の安定性を確約される。

あくまで学生の噂だ。

図抜けた実力、その論点も非常に曖昧であり、どのように選択さ

れるかもわからない。メンバーは該当年度の《委員長》以外存在を知らず、組んで動く際も互いの素性を知らずに行動する、という。

まあ、学生の間ではよくある、色の違う救急車だとか達磨送りの更衣室だとか、その手の眉唾ものの都市伝説である。信憑性も定かでなく、物証はほぼ皆無、モデルになるような人物も存在せず、語られている実力の噂にしても『一人で犯罪組織を一步も動くことなく壊滅した』、『特別製の狙撃銃で四キロ先から頭部狙撃』、『人間六人を誰にも気付かれることなく一瞬で六十六の肉塊に変えた』などのどう考えても都市伝説としか思えないような逸話ばかりが舞い込んでくる。

「子供じみた趣味ね、相変わらず」

「なんとでもいいたまえ。知的探究心とは子供のような好奇心と遊び心に自己満足、それに少しの欲望が絡んで先へ進むものなのだ。

……………それに、時際自身も完全に否定しきれないわけではないのだから?。」

「……………そうね」

わずかに目を背けて、萌木は小さくうなずいた。

悪魔の非存在の証明は不可能、また自己によって観測された内容を否定することは自己否定に繋がる。自分が超常の存在を肯定できる場合において超常の現象を否定することができないように、一部の人間、少なくとも俺たちにとって《委員会》とはあながちただの都市伝説とも言い切れないのだ。

その原因が、さっきの萌木の言葉にもあつた《リバーズ》という言葉。《委員会》と同じく都市伝説存在ながらも『異常事件』という形で世間に浮上することのある都市伝説、《委員会》の存在を肯定しかねない『超常』が、それ。

発生は……………詳しくは知らない。が、少なくともその存在は『血の十二月』以前に存在していなかったらしく、そうなると大体その起源は二十年ほど前になる。

現象としては、簡単だ。

強弱派手さ、見た目の華やか実用性などは置いて、それは軒並み『超常』なのだ。

例えばそれは何も無いところに炎を生じさせる力だったり、念動力としか思えない力を発揮するものだったり、大通りを飛び越えての跳躍を可能とする『理屈』だったり、触れたものを恐ろしい温度にまで加熱する力だったり、千差万別有象無象、共通項は「普通ではないこと」以外に存在しないほど散逸した『超常』、それが《リバース》と呼称される存在であり、能力である。

「それに、出没に至ってはその目撃例がゼロ、というわけではないだろう？」

「え？ 誰か見た人いるの？」

「あくまで可能性の話だな」

きよとんとした表情を浮かべる萌木に、実に楽しそうな笑みが向いていた。

「……………おい、お前まさか。」

「そうだろう、ナギ？ お前が今朝追われたという黒服、《委員会》と言われれば納得できんかね？」

嫌な予感的中した。

確かに探りは入れてくれと頼んだ。だけど、これのどこが『探り』だ。リーダーにも頼らぬド直球、慎ましやかさもへったくれもなし、直に聞いているに等しい詮索じゃねえか。

「聞けば、被害者は学生、それも我が校我が科の人間らしいではないか。ついで言えば先程調べたところ、本日更新済みの学生証を獲得していない人間はわずかに数名、その中でガバメントの使用者をあたる……………被害者は一名にまで絞り込めた。それによるとその男子生徒、随分と汚い仕事に手を染めていた節がある」

汚い仕事。パツと思いつくので裏社会での脅迫じみた押し付け警備、武器の密売、情報の漏洩、強権悪用の殺人行為、といったところ。いずれにしてもやってるのがバレたら即刻NAS 殺人者の葬

送路線直送り、よくても権利剥奪の上で退学になるような所業、仮に《委員会》が存在したとしたら、到底放置されるとは思えないような悪行ではある。

が、だからといってあの黒服が《委員会》だと考えるのは、余りに早計に過ぎないか？

「だからって《委員会》って言うにしても早すぎだろ」

「かもしれないな。だが否定するにしても早計だと思わんかね？」

いや確かに肯定するにも否定するにも情報が全然足りてない状況ではあるけど。

「第一、その人物が汚い仕事に手を染めていたという事実も、学生間の噂から我が手芸部のネットワークを駆使して発見した情報だ。

早々発見できるルートではありえなかつたし、仕事の内容も……まあ、民間人の目がある場所で語るには少しばかりシヨッキングであつた、とだけ言つておこつた」

つまりはそれだけヤバいってことだな。叩けば間違ひなく《フォトグラフ》クラスの厄介なところに首を突っ込まなければならなくなるレベル。裏の社会でも避ける血溜りを泳ぐに等しい行為。

「とにかく、そんなレベルの仕事にどつぷりと全身を浸している人間を生かしておくほど、我が校は寛容ではないはずだ。少なくとも、俺はそう考えている」

「……………同感だな」

国策学校第一、言い換えれば、国の駒にもつとも近い場所。近くに存在すればその駒は強力、かつ確実に動かすことができるが、それ故にそこには毒を孕ませてはならない。

ここは、そういう学院だ。

犯罪行為に手を染めている駒、学生間の噂という不確かなものに乗らなければ尻尾すら出さない隠匿性。肅正されるに理由は十分に倫理的にも許されはしない。

だけど…………

「どうしてそこで《委員会》なんだよ」

「ぶつちやけてしまえば、特に理由はない」
「おいおい。」

「目の前に事件の話がある、謎の存在が現れた、そこに絡めることのできる信憑性もある程度確保された都市伝説。……ここまできれば、話の娯楽性を高めるためにも多少のフィクションを交えてでも語った方が楽しいだろう?」

「にやり、と小春が含み笑い。眼の色が変わる。『探りとしては十分だろう?』 瞬き信号で返す。『ああ』。」

「お前の娯楽は趣味悪いんだよ。萌木にもさっき言われただろうが。だろ、萌木」

「え? 何?」

「て聞いてなかったのかよ……」

「数秒前まで話に乗ってたくせに、何で学生証見てやがるんだ……。まったく、興味が無い話題に映った瞬間これかよ。」

「別に無理に話に乗れとは言わないけどな」

「わかってるわよ。ただ、さっきの話でちょっと気になったから」

「何が」

「ちらり、とその眼が学生証に移った。」

「浮かんでいる情報は、見えない。が 表情からしてあんまり面白い情報じゃないというのはわかる。」

「事件よ、事件。あんたが見たって言う殺人事件。公式見解がどうなってるのか知りたくて、ね」

「なんだそりゃ……。で、どうだったんだ?」

「ぶらぶらと手を振りながら、気のないそぶりだ萌木はが答える。」

「いつものごとく。敵対組織の人間の可能性高し、だって」

「つまり殺害者不明ってわけですか。殺人会社に敵対組織は多い。」

「こういつとけば公式見解としても問題が消えてなくなる。」

「他にも情報ないか見てみたんだけど……」
フェイスクラッシャー 「FC」事件で学生の犠

「犠牲者が出たって話に埋もれてるわ。早速一人、新入生が瀕死の重症だそうよ」

困ったものよね、と何気ない素振りです。萌木は言った。

死者……いや、まだ死んでないから重症者一名か。確かに宴席で確認してうれしくなるようなニュースじゃない。その新入生には悪いが、今ここで持ち出されて楽しい話じゃないだろ。

ちよつと早いけど心中で冥福をお祈りする。まだ死んではいないが、瀕死の重傷となればNAS復帰はまず絶望的。人間的に生きてたとしても、NASとしては死んだも同然だ。

「ま、でもこれで大した事件でもないってこともわかったわけだし」「わかったのか」

「辛気臭い話は終わりにして、飲みなおすわよ」

はい？ ナンデスカいきなりその切り替えし。

「マスター、お代わりももらえるかしら？ さっきの以上に強烈なの！」

「ちよ、転校生さん？ あなた僕たちに一体どんなのご一緒させるつもりですか！」

「諦めろ、板橋。こうなった時際を止めるのはかつての俺でも不可能だった所業だ」

「そんな未恐ろしや！ あ、でも何も俺らも一緒に飲まなくても」

「マスター！ この男にテリブルを！ 無論アドシヨットはボルケーノ三つだ！」

「ちよ、マテヤ隆生寺！」

「あゝあゝ……マスター、俺にもトニック貰える？ アドシヨットはマイルドで」

「て隣で何のんびり和やかそうなもん注文してんだ！ 俺に飲料の自由はないのか！」

「なに、まだ受理されたわけではないのだから自分で好みのものを頼めばよからう。マスター、こちらにはジンジャーをドライでお願いします」

「合点言っただぜ……。マスター、よくわかんないけど穂村と一緒にの

頼む！」

「……………愚かな」

「うわ……………やるわね、この人」

「板橋……………見極めがでкинうち頼まないほうがいいぞ？」

「へ？ そんなキツイのか？ どれ試しに……………ってニガツ！ 猛烈にニガツ！」

「ほんと よくこんな飲むわよね、ナギって。私でもごめんだわ」

「洪さが語る男の味だよ。お前も味わえ」

「遠慮しとくわ、絶対に」

そりゃ残念だ。

にぎやかなカウンター席、でもさつきよりはずっといい。ここしばらくは、何も無い状況が続いてくれるとありがたいか。

……………ま、望むべくもないってのが、今の世の中だな。

冗談めかして内心で呟き、再び苦みばしった生姜飲料を喉へと流しこんだ。

7・対峙

× × × ×

なんだかんだで飲み続け、『エテュディアン』を出たころには夜になっていた。

碓市の夜の街路は暗い。

光と影は表裏一体。表通りに集中させた光が裏側の道をより暗くし、より深く夜の輪郭を浮かび上がらせる。

深く刻まれた夜の爪は、誘蛾灯のように脛に傷持つ獣を呼び寄せ、獣はまた別の獣を呼び、獣を狩る狩人たちが集い、そして血の匂いが立ち込め、また新たな獣を呼ぶ。

循環する連鎖が、碓の夜を作る。

この町の夜は安全だ。徘徊する行使するべき力を得た若人、それを監督し導き守り育てる先人、蠢く超常。そういった人間が、夜の密度を薄くする。転がる屍は日常ではなくままある非日常で、発砲される銃弾は日常の一下コマでなく厄介ごとの幕開けの合図。

一昔前であれば無国家地帯でのみ展開されていたような光景が、今の世界の裏通りの日常だ。

「っあー……飲みすぎた」

「ああ、俺も驚きだよ。お前はオアシスのラクダか」

人気のない路地に、間の抜けた声が木霊する。

あのまま小春と板橋の二人と別れ、流れで送っていくこととなった帰りの夜道。萌木の家は俺の家路とは正反対、学生向けマンションが立ち並ぶ地区の端っこにあるらしい。あの辺りに立ち並ぶ建造物はほとんどが殺人公社の息がかかったものばかりで、安全性は保障付き。交換転校生第一号を叩き込むにはいい場所である。

しかし、行つたところでその道程は安全ではない。

夜の暗がりには獣の狩場だ。砦の夜はよその町と比較して破格に安全な場所であるとは言え、それは絶対的な安全を保障されているわけではない。NASが殺人者を狩るのと同様に、殺人者が私怨や利益、理念や信念といった種々の思惑で、NASを狩るときだつてま
まある。

「いいのよ、別に……。ようやく砦まで来られたんだから、これぐ
らいの羽目外してもいいでしょ」

「まあそりゃそうだが、それにしたつて限度を考える。まったく……
おかげで軍資金の半分がとんだ」

実に恐ろしきはラクダのごとき。この細い肉体のどこに入るのだ
と衆人に思慮させるほど、このエリートはよく飲んだ。ノンアルコ
ールであつたのが救いである。アルコール飲料であれば、間違いな
くこいつは死んでいる。

「あら、存外貧乏なのね、アンタつて」
「うっせ。エリート組と一緒にすんな。底辺組はたいてい懐具合が
乏しいんだよ」

学生NASの実習過程において、公社から回される依頼を履修す
ることは可能だ。が、そこはやはり完全実力勝負の世界、受けられ
る依頼は成績順位やNASのランクによって増減する。となると連
動して上下するのが報酬の価格で、つまりどれだけ頑張つても、底
辺組がエリート組に追いつくのは難しいのである。

「ああ、そついえはアンタつて今底辺級なんだつけ……。悪いわね、
時計塔での癖が抜けてないみたいで」

「別に、底辺つて言つたつて並ぐらいはあるぞ。板橋だつて、ああ
見えて近接戦じゃ強い」

「へえ、さすがに『剣の板橋』つてどこ？ の、割には補助刀剣サブエッジが
お粗末だつたみたいだけど、彼放蕩でもしてたの？」

「いや、単純に興味の問題。『拳銃あんのに剣術なんて、いまどき
ナンセンス』だとさ」

「随分とわかりやすい理由ね……。何、つまりは趣味の問題ってこと?」

「どうやらそうらしい。ったく、何考えてんだか」

「ふふ、確かにそうよね。まあ、実用性があるだけまだまし、か……」

花開くように明るく、儂げに萌木が笑った。

「でも、考えてみたら武装を趣味で選ぶ人って多いわよね。日本刀だけ、とか実用性考えてないロマン仕様の銃、とか人によってはチーリングン抱えてたりとか……」

「いたのかよそんなやつ……」

しかしチーリングンさておいて、NASの中にはそういった理由から武器を選ぶ人間が多いのも事実である。実用以上に愛着で武器を選択し、そのドクトリンを会得することにつながったとしても、NASとしては不思議ではない。

そして、中にはどう考えても実用には不向きな実用選択武器も、存在する。

今朝の黒服を思い出した。

俺と同じ年、口につきこまれた銃口。怯えの情にためらった様子を見せず、引き金を引き絞った黒い意匠のひとりの女。

使用銃器、AMオートマグ?。

萌木の銃と、同じ。

「……………」

あの人物にどんな思惑があったにせよ、俺自身、ひいてはその近隣にいる人間を殺しにかかることぐらいはあり得る。殺人とはすなわち事故。人の思想が万時流浪の代物であるといっているのであれば、そこから生じる全ての行為もまた同じ。そして最後に突き付けられる選択肢も、常に同じだ。

与えるか、奪うか。

無限の選択肢が帰結する一つの結論。

感情や思想とは無関係に突き付けられる無情にして絶対の選択肢。

逃げ出すことは与えること。殺すことは、奪うこと。それは単純な二者択一。自らを与えるか自らが奪うか。殺すか殺されるかの単純な分岐点だ。

「………… ナギ？」

考えるな、と自分に言い聞かせる。それ以上は危険だ。思考の渦に深入りするな。ただ現在だけを見つめ、過去の自分を屠殺しろ。

「あ、悪い。なんだ？」

「いえ、何ってことはないんだけど…………… どうしたの？」

「いや別に。ただ今朝の奴が俺狙いだとしたら、今って結構狙い時だろうな、って思ってたな」

誤魔化すように呟き、緩んでいた歩調をもとに戻す。

偶然に失う危険は軽くとも、必然に襲われる危険は大きい。この道は狙われる者にとって、虎の巣も同然だ。

「あ、そういわれてみればそうかも」

あたりを軽く見回し、ここがどういう道であるのかを遅時きながらも理解した萌木。無意識なのか手は腰のWIDAに伸びているあたり、警戒はしているようだ。

「だったら…………… いつか」

独り言のように萌木は言い放ち、こちらに背を向けて数歩、つまり今までやってきた方向へ戻るように、歩を進めた。

「……………？ どうした萌木。忘れ物でもしたか？」

「まさか。忘れ物するほど物持ちは良くないわよ」

くるり、とその場で踊るように踵を返す。そのままゆっくりと一歩、一歩。まるで距離を確かめながら歩いているような優雅な歩調で、萌木が俺から離れていく。

「ねえ、ナギ。一つ聞きたいんだけど……………」

「…………… なんだ」

いつも通りに言いながらも、内側にはいく先の未知への警戒が募る。離れていく萌木。それはさながら生じた時間。絆という不朽の幻想に穿たれた間隙。

その間隙に不吉を覚える。

じわじわと身の内側に広がっていく対峙の感触。再開した友人と談話にいそしむ感覚ではありえない、意図を意志を意思を内心を心境を測ろうとするそれは、まぎれもない戦争の感触。

その感触を助長するように、萌木は両者五メートルの距離で足を止める。

五メートルの間合い、それは孤児院時代、萌木が最も得意とした近距離格闘戦の間合い。

殺意があれば必殺を放てるその間合いで、萌木は口元をわずかにほころばせながら、言った。

「あなたが手を抜いてる理由って、なんなの？」
いきなり。

あまりにも、いきなりなタイミングで。

課題を忘れた時の理由を問うような当たり前の口調で。

萌木は、その疑問を口にした。

強烈な意志のうかがえる断定口調、言い訳も言い逃れも、すべてを遮断するかのような確信を持った目。

それらが、その中から逃げ道をそぎ落としていく。

「……どうしてそんなことをする必要がある？」

苦し紛れのような語調。その言葉を、意志と確信の刃は両断する。「知らないわ。少なくとも、私にはそんな必要があるようには思えない」

「だったら」

「だから、聞いているの」

盾を叩きつけるような苛烈な口調だった。

言い逃れは不可能、その予測が現実に追いついた。端的な事実はその現象として俺の脳裏に浸透し、一つの警鐘をかき鳴らす。

「……隠し通せない。」

そして、守り通せない。心中に抱いた一つの決意も、過去に置き去りにしたその由縁も、意志と確信とで武装したその言葉の前で白

日へと晒される。

「ただの実力不足、なんて戯言は聞かないわ。そんな事実、ありえないってことは私が一番よく知ってるもの。第一、半端な實力しかないっていうなら、今朝私から逃げおおせたことに説明がつかない」
「……っ！ やっぱり、今朝のは……」

断言するが更なる刃となつて、隠匿の鎧をはぎ取っていく。『委員会』、『リバーズ』、追跡者。いくつかの断片的な単語が脳裏を旋回。隠匿の鎧が内側の矛盾を露見させていく。

意志の刃の担い手は、鼻白むようにこちらを睥睨した。

「白々しい。あれだけ小春に探り入れさせといて、気付いてないわけないでしょ。だけど わかるわよね？ この状況」

今朝俺を追ってきた人間が萌木であり、そして今朝の黒服は俺を殺したがっている。加えて先程の問い、黒幕には手の内がある程度見せてある。あたりに目撃者はなく、邪魔が入る要素もない。

隠匿の鎧のその兜、隙間につきこまれた刃が、自白を促す。いざとなれば刃が振るわれ、力づくでも内側が白日のもとへと晒されてしまうことだろう。

猫に追われる窮鼠を幻視する。もはや、逃げ場はなかった。

「……っ」

意志と意思とが研磨する見えざる火花の中、ポケットに手をやる。握りしめるのは金属柄。バタフライナイフの硬質な感触。ロックを外したその凶器は、時に拳銃よりも確実に他者の命を略奪する。

だが……それは相手も同じ。

腰に回った右の腕、その先にはWIDA、自らの装備すべてを格納した武器庫が存在する。WIDAの展開、それに要する時間はわずかに0.2秒。それだけの速度を持つて、異空に広げた腸をその箱は吐き出すだろう。待っているのは致死の弾丸。音を超えぬ人の身には知覚不能、防具を貫く死神の矢だ。

一触即発、常時戦闘。生殺与奪は両者の手の内。毒を孕んだ風船をつくような濃密な殺意が、二人の間を巡っていく。

その最中で　　萌木は、笑っていた。

「……そう。それでいいの、違うのは遅いか早いかだけ。どの道、私はあんたを殺さなきゃならない。そういう仕事なのよ、《委員会》は」

《委員会》は目撃者を決して逃さない。幻想は幻想であるが故に現実を律する力を持つ。幻想はどこにもないが故にどこでもない場所を律する力を持つ。それは見えぬ全体を縛り上げる見えない力。縛る箇所が不明であるが故に、それは全体を恐怖という名の縄で感じがらめに縛り上げる。

故に　　幻想を暴いた人間は。

自らを締め上げる縄の全景を見てしまった人間は、幻想の手によって幻想が幻想のままであるがために、抹殺されなければならない。だから　　仕事の前に答えて」

幻想の執行者は、決意を秘めた瞳で、幻想の篡奪者に問いかける。「　　どうしてあんた、手抜きなんてしてるの？　ちよつと期待したのよ、私？　　碇にあんたがいるって零から聞いて、《委員会》に勧誘されたときに、あんたもそこにいるって。また一緒に戦えるって。　　なのに、底辺なんて、何の冗談なの？」

「はっ、冗談のつもりはないんだけどな」

「なら真剣なの？　……違うでしょ。ええ、あなたほどの人間が真剣になって、今程度であるはずがないの」

「買い被りだ」

「いいえ、買い被りなんかじゃない。少なくとも今朝、あなたは自分でそのことを証明した。私の撃った弾丸を避けて殺害可能な間隙を作成し、その後に逃げ出した。他ならない　　あなたがあの《町》で手に入れた《リバーズ》を使って」

「……っ」

鎧は、剥がされた。

隠されていた真実は幻想の執行者の振るう意志の剣の元、隠匿の鎧の外側へとはじき出された。

鎧をなくした戦士の末路は一つ。武器を手にした者の前に無防備な自らを晒すことは、すなわち死ぬことに等しい。

「戦いなさい、ナギ。もう逃げられない。ううん、逃がさない。あなた自身の実力からも……私からも。さもないと　私は、あなたを殺すわ」

一寸の躊躇も、一拍の容赦もなく、幻想の執行者は宣言する。かつて幼馴染であった人間であろうと殺すと。

お前の過去全ての関係を棄却し、今ここに敵として障害として弊害として、その存在を排斥すると。

遠い街を幻視する。

見える色は赤、赤、赤、赤。手に滑る感触も腕に重い輪郭も肩に響く衝撃も胸に届く温水も腰へめり込む重量も足へ沈む重量も、すべて無意味と流れ去った数多。幾度も要求されるのは願望と代価。

死にたくない、と幾度も願う。殺すしかない、と幾度も分る。

命の願いは命の代価。奪う誰かから奪わなければ、自らのすべてを与奪される。

それでも、願うのなら

「……………まったく」

ポケットの中に手を突っ込んだその姿勢から動くことなく、呟くように心中のわだかまりを吐き出す。

「やるしか、ないってわけか　」

内側に籠る熱。切り替わる脳裏。眼前の人物を見据える。敵対者武装は既知、戦術は既知なるも未知の要素を含有、未知への対処を推奨。今時をもって眼前の人物を『再開した幼馴染』ではなく『幻想の執行者』へと認識を変換、殺人行動の執行を行う。

機械的に行われる認識の切り替え。警戒によってクリアになった視界に移る《委員会》の執行者をとらえ、俺は深々と、身を沈めた。……………いいぜ。やるってんならやってやる。だけど　」

「 執行者が腰のW I D Aに指を伸ばす。その刹那、

「 死んでも、後悔するんじゃないぞねえぞ」

俺は、全身の全瞬発力を持って駆けだした。

8・実力差

× × × ×

「死んでも、後悔するんじゃないぞ」

殺劇の開始を告げる言葉と同時に、萌木は右手をWIDAへと走らせた。

右手がWIDAの格納キーを叩く。

単純な動作、叩くべきは四つのキー。淀みなくたたくその動作は、まさに神速の一言。

萌木自身が得意とする距離は近中距離。拳銃による基本銃撃戦、陽動と牽制を含めた拳銃格闘戦、クロスレンジにおけるナイフ格闘戦および総合格闘戦、それら全てを高い水準で獲得した彼女にとって、十五メートル以内の距離は必殺の間合い、自らの保有するすべての技術を持って他者を打倒しうる、もっとも的確な間合いだ。

この距離であれば、逃がさない。

それが一対一となれば、なおのこと。

かつて孤児院にいた人物たちには及ぶことのないそれらの技術も、一体となって使用されれば無敗の技術となる。振るわれるそれらは身のうちに染みついた必殺の技能、《委員会》内部はおるかプロンASの世界ですらも通用するだけのものであるという自負がある。

そして……それは自身の思い込みではない。

キーを叩くその一連の動作はまさに神速。要した時間はわずかに0.2秒、人間の反射に肉薄する極限の速度を持って入力されたキーは刹那の時間でその腸、大振りのオートマグナムを吐き出した。射線を合わせ、狙い、引き金を引く。

0.2秒。さらに重ねた0.2秒。極限まで研ぎ澄まされた技法が可能にする音にさえ肉薄した神速は捉えられることなく猛威を振るい、結果射線上のあらゆる物を破壊の礫で打ち破る。

が、その直後。

驚愕と同時に一刹那、時が止まったかのような錯覚に陥った。構え駆け出した渚、向けた銃口の先にある距離は、零。

お互いの微細な表情すらも読み取れるその距離、呼吸すら感じられるような近さへと、渚はその身を進めていた。

とつさに拳銃の狙いをずらす。が、その瞬間再び渚の姿がかき消えた。

どこ、と探す暇すらない、まさに本能の反射で身をかがめる。

瞬間、全身の毛が逆立つほどの耳元近くを、白刃が通過した。

はらはらと幾本かの毛が宙を舞う。乱された髪が左半分の視界をかき乱す。

左側 脳に届くよりも先に、左側の足元へと足払いをかける。瞬間視界を黒い影が反転するように横切り、空を切った左足が身を回転させる力として作用し、振り乱された髪が視界を覆って、

「……………くっ」

「ちっ……………」

大きく後ろに跳躍し、萌木は渚と距離をとった。

直後、首筋に感じる鈍痛。思わず手を伸ばすと、首の左側が線上に腫れあがっていた。

再び対峙した渚の手の中、殺意の光を無造作に放つその刃は、前後が逆。

峰にある刃破断面に絡まった茶色の髪と、先程の一瞬。

峰打ち、そう理解するのに一瞬。そして

本気なら、殺されてた……………！

嫌な汗が湧き上がる。それとは別、全身を駆け抜けける確かな感情は……………高揚。何も変わっていない、精細を欠くことも速度を損なうことも膂力を減ずることもなく、萌木自身の成長に合わせたかのような速度で進化を遂げた、その技術、その粹。

自らを殺しうる人間が、今、目の前に存在しているという実感。その事実が、感触が、その実感が、そしてその存在自体が、時際萌木という人格を過熱し冷却し高揚させ、そして自らの性能の限界までを引きずり出す。

獣のごとき昂揚の中、萌木は過去を想起する。自分が今まで過ごした孤児院以降の中学時代、学生N A Sとして人殺しの日々を送る中で、これほどの腕を持つ相手は存在しただろうか、と。

答えは、否だ。

「両側行きたかつたんだけど……やっぱ無理か、お前相手だと」

「は、はは……」

笑みが止まらない。恐怖と昂揚と興奮。血沸き、肉躍る。常人では不可能な神速での拳動、抜き打ちより早い対峙、それでもなお、渚の狙いで言えば不足なのだ。

「……やっぱり、鈍ってなんかいないじゃない」

「まあな。テストとか仕事とか、割とサボってるし」

あれほどにまで固執していた隠匿を、あっさりと渚は首肯する。「どうして、なんて聞くなよ。これは殺し合い、終わった後に立ってるのは俺かお前か、そのどっちかだ。そして今ここで、俺は宣誓する」

再び、彼は身を深く沈めた。先ほどと同じ、神速の歩法の構え。抜き打ちですら間に合わぬ、おそらくは銃弾ですら当たらぬであろう、必殺の拳動の前準備。

「今ここで武器を収めれば、俺は追わない。お前の事情もお前の理由もお前の過去もお前の組織も……一切合切を忘却して元の日常に戻ってやる。ここであった殺し合いも今日話したことも、お前が黙秘すればどこにも流出しないことを契約する。その上での質問だ。……どうする」

このまま殺し合うのか、はたまたこの夜の出来事をなかったことにするのか。

絶対的な凍土のような冷たい声で、渚は萌木へと問いかける。

渚の腕は見た。見せつけられた。抜き打つ銃弾にすら届くその速さ、首に付けられた峰打ちの痣。萌木自身に手を抜いた覚えはない。殺し合うと宣言した以上、そこに甘さの入り込む余地はなく、それ故に萌木が振るった腕は、全力のそれだ。

だからこそ、端的な事実として理解できる。

このまま戦えば、十中八九萌木は殺される、と。

人間として戦えばかなわない、身に着けた拳銃も剣の腕も、渚の前にはかなわない。恐るべきことに、アレはまだ底をみせていないのだ。

だが、萌木には引けないだけの理由がある。

だからこそ

「……………」

無言で、萌木はWIDAを叩く。手にした銃を収め、引き抜くのは二本の西洋剣。生まれは中世スイス。形状は両立、片手での扱いに馴染むよう、刀身を切り詰めた異形の私生児。バスタードソード 啜った命は幾十幾百、幾多もの戦場を超えて生存を約束した、時際萌木の近接スタイル。

「……………そうかよ」

身を沈めた姿勢のまま、渚は嘆息する。同時に広がる剣呑な気配。一触即発、白刃を踏むかのような危険な気色の中、じりじりと時間が流れ、

「……………《幻在》」

渚の眩き、その刹那、その姿が掻き消える。

無謬の一瞬。時間が、顔を失った。

渚の体術、その本質は《不可視》。超えるのは光でなく認識、神経という音にも等しい速度に肉薄する拳動、追いつけるわけがないという油断、拳動までの極小の間隙、そこに生じる感覚不能の一瞬を積み上げ、彼は殺戮までの時間を作り出す。

故にそれは幻。見えていながら見えてない、認識ではなく意識の

間隙を突くそれは、まさに幻の体術の名にふさわしいとさえ言えた。だからこそ、渚は止められない。極まったそれが生み出す速度は刹那の間とはいえ音にさえ肉薄する。わずか数メートルの距離で、音に追いつくなど不可能だ。

そう、追いつくのは。

音とは言えど、空間は飛び越えられない。壁があればぶつかる、穴があれば落ちる。距離は距離として適用され、故にかな音であろうとも進む物としての束縛からは逃れられない。

人が、音に追いつけないというのなら。

やってくる音を、迎え撃てばいい。

駆けだされるその一瞬、萌木は自らの内側を意識する。日頃は認識の埒外として存在するそこは《黒い火》。皮膚を焼き骨を焦がし血を沸き立たせ無数の屍を焼き焦がす風景の魔性。魔性は魔性としてあるが故に過去でありながら現実を幻想の焰で塗り替える。

魔性を、肉体へと装填する、

刹那、掻き消えたその姿がやってくるであろう自分正面へ目がけて、萌木は自らの内側の魔性を炸裂させた。

「なっ……」

生じるは爆炎。皮膚を焼き骨を焦がし血を沸き立たせ無数の屍を焼き焦がす記憶の風景は、充填された魔性を持って現実の風景へと顕現する。

事前動作一切なし、硝煙の欠片も匂わせることなく突如出現した火葬場のごとき炎。

それをかわしたのは、いかなる反射速度の故か。

呻くような声と同時に、渚の体が地を這うように横へと跳んだ。

直線拳動からの曲線拳動。その動作は幾多の戦場を駆けた萌木の目から見ても、見惚れるほどに速い。このまま螺旋状に距離を詰めたとしても、萌木の首を刈り取るのに五秒とかならないだろう。

しかし、その疾風のごとき速度も視力には及ばない。

螺旋を駆け抜け抜けねば切りつけられない渚と。

ただ見るだけでいい萌木との差では、五秒ではあまりにも長すぎた。

「……！」
萌木の目の両目が光る。

色は血を思わせる懸濁した深紅。奇しくもそれは萌木があの日に見た風景と同じ色。かの風景を再現する魔性は、かの風景と同じ色合いを持って同一の風景を再現する。

異変までは、0.1秒。

自らの肉体に高温を感じた瞬間、弾かれたように渚は左へ、螺旋の中心へと跳んだ。

突然爆ぜる爆炎、が、それでもなお渚の肉体にかかる高温は緩まない。

「……っ」
爆炎に浮かんだ渚の顔に、焦りの色が浮かんだ。

萌木の保有する再誕の異能、《リバーズ》は銃弾のような飛び道具ではない。その異能は萌木の視界の明暗や距離の遠近によらず、萌木が『見た』と認識したその場所へ、萌木が《死んだ》その瞬間の風景を再現する。

それ故に、萌木の視界の中にある以上、逃れることはできない。

殺せる……！！

内心で萌木はそうほくそ笑んだ。

が、次の瞬間、その笑みは溶解する。

「え」

眼前の風景は数俊前の再現。渚との距離はすでに必殺、互いの刃圏のその内側。異能の炸裂、その効能の範囲内。

「……なっ……！」

思わず内側の魔性を収めた。瞬間、渚の白刃が萌木へと延びる。とっさに受け止める西洋剣、受け止め、切り返した二刀を、渚は萌木を飛び越えるほどに跳躍してかわした。

まずい。

そう思考するまもなく、萌木は前方へと転がった。

首筋皮一枚を縦に通過する灼熱。ためらわず振るわれたその刃に戦慄を覚え、立ち上がると同時に背後を振り返り、爆炎を放つ。

が、その瞬間にはその姿は背後にはない。

どこへ、と思う。その一瞬。

首筋に、ぴたりと刃が突き付けられた。

「……………」

「……とった」

突き付ける刃の持ち主、その姿は、足元。

地を這うような姿勢から急転、跳ね上がった刃が首を上へと貫くような角度で、皮膚一枚を舐める。

視界の外、武器は届かず、反撃の手管はない。視界を動かすわずかな動作にすら渚は反応し、首筋に突き付けた刃を容赦なく首へと突きこむだろう。

次は警告でも警告でもない、待つのは容赦のない、死だ。

「チェックメイト。反撃、逃亡、ともに不可能だ。手中の武器を捨てろ」

「……………」

こいつ……………！

内心で歯をかみしめる。この期に及んで、渚は萌木を生かすつもりか、と。

西洋剣を手放す。渚の足が刃を蹴り飛ばし、背後へと金属音が響いた。

「これで残りは拳銃二つと《リバーズ》だけ……………。この距離じゃどつちも無意味だ。お前の負けだよ、萌木」

「……………だったら、殺しなさいよ」

「どっつして」

「どっつして………当たり前じゃない。殺し合いなら、敗者は死ぬものでしょ？」

殺し合いの末の両者生存に対する当たり前前の口上に、渚は呆れた

ような声を返した。

「あのな……お前は殺されたいのかよ」

「何言ってるの……。そんなわけ、あるわけないじゃない」

「ああ、だろうな。俺も殺したくない。なら、それでいいじゃないか」

言葉と同時に、あつさりと、あまりにもあつさりとした仕草で、渚は首筋に突き付けた刃を引いた。

突然すぎるその行為に呆然とする萌木。それを余所に、渚は手中のバタフライナイフを片手で滑らかに納刀し、ポケットへと収める。「まったく……余計な運動させやがって。時間食わなかったからいいものの、遅れてたらまた名織が何言ってくるから……まったく」

心底嫌になる、といった様子で萌木の背後へとまわり、足元の西洋剣を拾い上げ、柄を突き返した。

「ほら、返す。手入れ、しとけよ」

「……あなた……正気……？」

「正気も正気、明日の予定が気になるくらいには正気だよ。ああ、それも言ってみりゃ正気じゃないか。養成科の鬼訓練を忘却できるなんて、正気の沙汰じゃない」

くすくす、と渚は笑った。

その自然さに、ようやく萌木の驚愕も晴れる。目の前にいる先程まで殺し合った相手は、もうすでにその事実を終わったものと考え、日常の中に帰依しつつある、と。

だからこそ、萌木はもう一度同じ質問を繰り返す。殺し合いという生命の究極を乗り越えてなお日常、その感性が、その心情が、その理性が、萌木には全く理解できなかったからだ。

「あなた……正気なの？」

二度のその問いかけに、不可解に渚は眉根を寄せた。そのまま一秒ほど、考えるように表情を固め、ああ、と納得したようにうなずく。

「そういえばそうだったか。まったく、正気だとか狂気だとか、忘れてると不便だいろいろと……。まあ、その問いに答えておくと、俺は間違いなく正気だ。傷つけば痛いし殺されるのは嫌だし、死んでるのを見るのは辛い。それを正気じゃないっていうならお前が狂気だな」

「だったら！ どうして私を生かしておくの！」

「決まってるだろ。俺は殺したくなくて、お前は殺されたくない。利害が一致してるのに殺すなんて、時間と余力の無駄だからだ」
すんなりと、彼は答えた。

その自然さ、その素直さにしばし呆然と、彼女は立ち尽くす。

「なによ……それ。自分が殺されるかもしれないのにそれでも殺したくないなんて、どこの平和呆け」

否、と。途中まで口にして萌木は踏みとどまった。

先程、彼は言った。正気や狂気を忘れていると不便だと。つまり彼の中では正気や狂気といった概念は忘却されていてしかるべき概念であり、相手がどちらに属するものであると、気にもならない、ということだ。

正気、狂気を区別しない。正気は生かすもので、狂気は殺すもの。それらを区分せず同一の概念にとどめ置き、あまつさえ忘却するということは畢竟、彼にとって生かすことも殺すことも同列であることを意味する。

それは殺すことも殺されることも日常であるということだ。

そして日常の裏にある人の悪意を当然として受け入れるということだ。

それはつまり、彼が誰よりも闘争の中に身を置いているという証明に、他ならない。

だから萌木を生かすのも、また殺しにかかってくることを当たり前と認識しているからで

「あなた、まさか……」

それが当たり前でなかった三年前、当たり前となってしまうた今。

両者を隔てる究極的なまでの境界線に、萌木は心当たりがあった。

「あなた　まさかあの《大葬儀》に…？」

そうであつてほしくない、そんな祈りを込めた萌木の問いは、

「ああ、いた」

あつさりと言った渚によつて、祈りもろとも解消された。

虚脱する。その直後、納得する。実力、無気力、殺し合いに対する軽さ、それらすべてに、今ここで回答が明示された。

《大葬儀》、遡ること二年前に発生した空前絶後の大惨劇。町一つに住む住人すべてがただの通り魔を発端として恐慌状態に陥り、その結果生まれてしまった無差別的な連鎖殺人事件。述べ被害者数二十七万二千七百余、公式発表生存者数わずか二百九十一。パニックの拡大防止のために殺人公社はその周囲を《リバース》動員によつて壁で覆い、内側に残つた五万数千を見捨てた。

そして、その内側にいたというのであるのならば。

それは狂気の溶鉱炉の蠱毒の内側と言っても、差し支えない。

理解と驚愕、恐怖と憐憫、入り混じつた感情によつて動けない萌木を余所に、渚は背を向けて歩き出した。

「待つ」

「ああ、あと《委員会》のトップに穂村渚からの伝言だ。『考えといてやる』ってな」

「……え、ええ……でも……」

どうして、という声は、発されなかった。

落ちたと思つていた幼馴染、そのあまりの高さに、萌木は押しつぶされ、ただ見送るしか残された手段は存在しなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2328t/>

Die and Diary （改訂）

2011年11月21日21時43分発行